スカイスロープ

秋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スカイスロープ

【Ｎコード】
Ｎ３５９５Ｙ

【作者名】
秋色

【あらすじ】
ただ、空を目指して――

美術部部長、三咲麻耶の「飛行機を造ろう」の一言。
それは、ただただ、うだるような暑い夏の日。

１．果ての無い空（前書き）

青春時代、無理な事なんてなにもないのさ！

……はい、痛くてすみません。感想お待ちしてます。何でもよろしいので、一言くれるとうれしいです＾＾

※７話の投稿は１１／２１です。
８（最終）話の投稿は１１／２３です。

1．果ての無い空

些細な思いだったのかもしれない。

でも、あの時は、まぎれもない真実だったから。俺が彼女に抱いていた感情は、きっと――恋。

だから――

俺は今日、彼女を連れて走る。遥かなる、あの雲の上まで。

＊＊＊

「ライトフライヤー号？」

一年部の教室がある校舎の三階。その隅にある生物第一教室には、合計四つの長机が、円を囲むかのように並べられていた。部屋に入って右側、手前にあるイスに腰をかけていた俺は、柄にも無く素っ頓狂な声を上げる。その声に、二つの机を挟んで対面に座る内村が、小さな肩をびくっ、と震わせた。

部屋の最深部へと視線を向けると、肩のあたりで切りそろえられた直毛が、ホワイトボードの前で小さく揺れた。細長く、綺麗な指先は、今日は握りこぶしの中で眠っている。拳を握ったまま、両手を腰に当てた三咲は、いつものように勝気な瞳で、部屋中を満遍なく見渡していた。

「工藤くん、説明」

三咲は俺の右隣を指差す。ガタンと、音を立てたイスが、勢い余って倒れそうになった。三咲の指名により立ち上がったのは、大きいフレームの黒い眼鏡をかけ、前髪はオン・ザ・眉毛ギリッギリ。細い体つきが、いかにも文化系、といった印象を与える青年。工藤くんこと、工藤雅史は、ずれ落ちた眼鏡をくいっ、と上げ「おほん」と、咳払いをした。

「はい。ライトフライヤー号とは、かの有名なライト兄弟が開発した、初の有人飛行機のことです。ガソリンエンジン一台を動力源として、二つ存在するプロペラを、それぞれ逆方向に回転させ飛行し、計四回の飛行を成功させました。ですが、四回目の飛行にて着陸に失敗し、大破。しかし、ライトフライヤー号の研究こそが、現在の飛行技術の大きな基盤となりました」

「はい、百点！」

大きく手を叩きながら、三咲は満面の笑みを浮かべた。工藤も、顔を赤くしながら頭をかいている。

「で、結局何が言いたいんだ？」

俺の言葉に、三咲は大きく顔をしかめた。なに言っているの、あなた。恨めしげな瞳がそう訴えかける。

「天海くん。ここが何部だかわかってる？」

馬鹿にしたかのような物言いに、少しむっとなる。そもそも、何をする部活なのかも良くわかっていないのに、聞く質問ではない。部活の名称と、それに付属する一般的な意味合いは心得ているが、それだけだ。三咲が部長を務めるこの部は、常識を逸脱したもの。何を考え、作った部なのか。知り合って一年とちょっと経つものの、未だはっきりとしていない。それでも、問われた質問の答えはわかっているので、答えないという選択肢はない。勤めて冷静な態度で腕を組み、ぼそっと呟いた。

「美術部、だろ」

「正解！　やっと副部長としての自覚が出てきたみたいね」

「出てきてない。大体、副部長なら空だってそうだろ」

「だって空は忙しいんだもの。現に、今だっていないじゃない」
三咲は改めて部室中を見回し、「ほらね」と肩をすくめた。わざわざそんなことをしなくても、誰にだって空がいないことはわかる。空が部活に現れる確立は、ここ最近、極めて低くなったのだから。もっとも、副部長だからといって、これといった仕事はないのだから、それでかまわんと、ひそかに思ってはいるが。
「だったら、工藤でもいいじゃないか。内村だっている」
「うるさい。年長者なんだから仕方ないでしょ。ま、そんなことより……いい？　今まではこれといった活動をしてこなかったかもしれないけど、これからは違うわ！　大空を羽ばたくには、翼が必要なのよ！」
俺の提案は、議論をする前から却下が決まっていたらしい。
両手を広げ、有権者に訴えかける政治家のような三咲。なにか、ものすごくいやな予感が胸の中で渦巻く。
「今日から、飛行機を造るわよ！」
予感的中。
これだから三咲麻耶と言う人間は困る。我侭、傲慢、唯我独尊。あらゆる要素をその身に内包しているので、およそ現実的な考えなどは持ち合わせる容量が足りないのだ。彼女との出会いをくれた部活動というものに、一言物申したい。
元々、部活などに入るつもりはなかった。中学の頃から何もしていなかったし、部費がかかるのもまた、面倒くさい。
それがどうだろう。
美術部、なんてもっともらしい名前ではあるが、断言しよう。ここは美術部ではないと。美術部ではない、美術部。それは、わけのわからない、素性がまったく知れない変人集団のことである。不名誉ながらも、俺はその変人サークルの副部長を勤めていた。
そのことに関して、弁解の余地があるというならば、二つの理由を上げよう。
まず一つ。進学先であったここ、真白学園高等部は、生徒全員の

部活動参加が義務付けられていたこと。
二つ目は、インスピレーションのようなものだった。今考えてみればくだらない、本当に後悔しているものだが。
ほとんどの生徒は入学してすぐ、あるいはそれでも一週間以内には入部を決めたそうだ。だと言うのに、俺は二週間たってもそういった気配を、あえて見せなかった。もしかしたらなし崩し的に帰宅部、なんて展開もあるかな、と思ったからだ。ま、そんな俺を先生が見過ごすわけもなく、中央廊下の掲示板にチラシが張ってある。だからさっさと探せ。と半ば命令とも言える脅迫を受け、しぶしぶと見にいった。

『君の勇姿が見たい！　柔道部募集！』
『今、知性が試されるとき！　軍人将棋部』
『私たちと一緒に青春の一ページを過ごそう。切手収集部』

数ある張り紙の中で、一枚、異彩を放つものがあった。

『美術部』

部活の名称、ただ一言。美術部、と名乗っているくらいなら、絵でも描けばいいのにと思うが、それも無い。それどころか、微妙に斜めにずれて張られていたり、他の部活動のチラシの上にまたがっていたり、しわができていて、中に気泡が溜まっていたりと、明らかなやる気のなさを感じた。
……ここでいいか。
はっきりと、そこで結論付けられた。何部に入っても、幽霊部員になるつもりでいたので、やる気のない部活ならばそれでいい。さらに言うならば、絵に関して、多少のたしなみもあったし、実はその日の早朝、幼いころからの友人たっての頼みもあったのだ。決まってないなら、是非美術部に入ってくれと。

どうせ、顔だけ見せたら部活に出る気など無い。帰る時間が遅くなるのは、一家の台所としての役目を果たせない上、バイトをする時間だって惜しい。

それだけでも伝えようと、その日、部室と指定されていた教室に足を踏み込んだ刹那、耳をつんざくような大声が響いた。

「もしかして、入部希望者？　空、やったわ！　ついに三人目よ！」

それこそが、美術部部長・三咲麻耶との邂逅であった。

「ま、実際にはライトフライヤー号そのものを再現するわけじゃないわ。ただ、飛行機を造るからにはと、目標を決めただけ」

「却下。造る理由がわからんし、作業場すらない。美術部なら美術部らしく飛行機の絵でも描いてろ」

それこそが、美術部が美術部と誇れない最たる理由。この部活には、「美術室」なるものが存在しないのだ。どうも、真白学園は中高一貫教育の為、美術の教科単位は付属で終了してしまうらしい。だから、高等部には美術室なるものを作っていたことは無いらしい。

「美術、って言うのは、なにも絵だけじゃないの。『視覚によって捉えられることを目的として表現された芸術』って言うのが定理。突き詰めれば、プラモデルだって立派な美術作品なのよ」

「アッ〇イもか」

「アッガ〇もよ。かわいいじゃない」

人差し指を立てた三咲が解説する。

そのまま、延々と何かの口上を述べる三咲を無視しつつ、ため息を落とす。

「失敗だったな」

俺の呟きなど、もはや三咲の耳には届いていない。どこから持ってきたのか、大量の本を抱え、雅史と共に大きな紙に何かを必死で書いていた。

「なにが、失敗なんですか？」

正面を見やると、上目遣いで内村がおずおずと見上げていた。三咲には届かなかったこの思いは、内村がしっかりと汲み取ってくれ

たらしい。
「なんでもねーよ」
いまさら部活に入って失敗したなどと、口にできない。それは、この部活に好き好んで入った内村に申し訳ないと思うから。というより、こいつもなんでまたこんな部活に入ったのだろうか？　そんな俺の疑問は、少し前に本人に投げかけられた事がある。
「とても、眩しく見えた人がいるんです。その人に、少しでも近づきたくて」
答えを口にする内村の目は、どこか遠くを見ていて、心ここにあらず、といった感じだった。憧れのようにも見え、昔を懐かしんでいるようにも思えた。きっと三咲のことであろう。
「眩しいなんて生ぬるいもんじゃないだろ。もしあんな奴が四六時中傍にいたら、目が痛くなっちまう」
内村はきょとん、と呆けた面を浮かべた。それでも、一時もしないうちに、普段の顔つきのまま笑った。
「ですよね」
そのまま二人で意味も無く笑いあった。何がおかしかったのか、双方とも今ではわからない。これも、この部の特徴なのかもしれない。三咲の言動、行動、それらがあるだけで、気軽に笑い合える。普段は迷惑しかかけない奴だが、本人のいないところではしっかりと己の役割を果たしている。月、なんて静かな明かりではない。きっと太陽。うっとうしいくらい日差しを照らすこともあるが、心を暖めてくれるのはやっぱり太陽だ。彼女がいるからこそ、美術部はまとまっているのかもしれない。
ちなみに、今の三咲はカンカン照り。今日は狩野空と言う水分もない。放っておいたら脱水症状を起こすのは必至だろう。逃げるが勝ち。すかさず、かばんをひっ捕まえて立ち上がると、一目散に入り口へと向かった。
「え、っと！　か、帰るんですかっ？」
「ああ。今日は、ってか、今日も何もないだろ。飛行作りなんて、

天才工藤君と三咲部長に任せてりゃいいんだよ。内村も帰るか？」
内村は振り返り、作業に奮闘する二人と、扉に手をかけて今にも帰ろうとしている俺を交互に見て、あたふたとしている。しばらくすると、決心したのか、かばんを持ってやってきた。
「んじゃ、帰るとしますか」
「は、はい！」
そうして、なぜか顔が赤く染まった内村を連れて、外へ出るべく扉を開けた。

「本当によかったんでしょうか……」
「別にいいんじゃねぇの？　どうせ、俺たちがいてもすることないし」
「そうかもしれませんけど……」
二人で海岸線を歩く。すると、時計の短針のように、ゆったりと景色が動く。
やっぱり、こんな雰囲気は好きだ。
海辺の町である此処は、坂がとにかく多いうえ、住宅街に入ると道が入り組んでいて、わかりづらい。そのため、この町の人の大多数は自転車を使わない。使っても、子供くらいなものだ。真白学園に通っている生徒は、登下校にわかりやすい海の近くを歩く。これは、この町に住む人の常識であり、俺の実体験でもあった。
自転車に乗りたいと思うのは、子ども心として誰にでもわかることのはずだ。昔、ばあちゃんに無理を言って買ってもらったことがある。サイズは大人用の大きいやつだが、成長しても使えるからいいや、と楽観的に考えて。
あの自転車、坂道をノーブレーキで駆け下りた折の骨折以来、乗ってはいない。おそらくはまだ、ばあちゃんちの物置にあるのだろうが。

右手をじっと眺めつつ、ふと隣を懸命に歩く内村に目をやった。セミロングの茶色い髪の毛を揺らし、懸命に自分についてきているのに気がついた。残念ながら、その表情まではおがめない。

当たり前だ。

内村はかなりの小柄で、俺との身長差はゆうに頭一つ分は超えている。顔なんて見えるわけがない。その上、極度の恥ずかしがりやでいつも下を向いて歩いている。内村は目も大きいし、かなりかわいい部類に入ると思うのだから、もっと堂々としていればいいのに。

そういえば。思い出したことがある。それは、ついこの間のこと。内村は俺らの目の前で告白されたのだ。下級生だから、俺からすれば名前はおろか、顔すらも知らない奴だったが、その告白の仕方には度肝を抜かれた。見るからにおとなしそうな奴が、部室に入ってくるなり、それなりの大きさの声で口走ったのだ。

「俺と、付き合ってください」

と。顔を真っ赤にして、手をもじもじとさせ女の子のようにも見えた。そのくせ、視線は内村からずれることはない。純粋に、かっこいいと見惚れた。惚れた女に、こんな告白ができるなんて。羞恥心だってあったろうし、畏縮していてもおかしくない。結果として、内村の口から出た言葉は、「ごめんなさい」って決まり文句だったけど、彼は赤くした目をこすって、「ありがとう」と言った。一見、彼の勇気は無駄になったようにも思えるけど、それは違う。勇気を出したこと、それこそが一番重要で、難しいことなのだ。

俺自身、伝えきれていない想いという存在は、それこそいくらでもある。

内村が告白を断った理由を、俺は知らない。知る必要もないと思っている。もしかしたら、もう彼氏がいるのかもしれないし、好きな人がいるのかもしれない。純粋に、彼のことを快く思っていなかった、という可能性もある。それなりの理由があったのだ。自分には関係ないし、それを知ることは二人に対する侮辱かもしれない、なんて思う。

再度、内村の方をちらりと見た。依然として、早歩きをして必死でついてきている。苦笑して、ちょっとだけ歩調を緩めると、内村は頭を上げて、俺の顔を見る。ほっと息を吐いて、「ありがとうございます」と言い、急ぐのを止めた。妹なんていないからわからないけど、きっとこれくらい、かわいいものなのだろう。

「美術部って、三咲部長が作った部なんですよね？」

突如として放たれた内村の言葉が、俺を一気に現実に引き戻した。それまで、内村がかわいいだなどと考えていたせいで、なにやら無性に恥ずかしくなってくる。

「ま、まぁなぁ。てか、よく知ってたな」

「はい。最初の部活で言ってました」

「うーん、そうだっけ？　覚えてねぇや」

右手で頭をかきながら答える。しかしまあ、美術部なんて、ホント名ばかりの部活だ。なら、美術部らしいことを始めるから、実はいいことなのか？　いや、そもそも今回は美術部らしいことなのか？　何やらわけのわからない思考が頭を駆け回る。

なにせ普段、部室では駄弁ってばっかり。時々、三咲がなにやら思いついて、奇妙奇天烈なことを始める。俺にとって、そんな認識しかない部活だ。明確な目標ができるのならば、これにこしたことはない。

「そういや、何かを作るのって、一年ぶりくらいだな」

「？　前にも、何か作ってたんですか？」

「あー、去年の今頃だったかな？　三咲が絵の具やらなんやら持ってきて、『絵を描く！』って言って聞かなかったんだよ」

描く場所もないのに、なんて思っていると、丘の上の公園まで描きに行かされた。完成するまで、毎日部活に来ること！　との厳命を受けて。当時サボってばかりだった俺を、奮起させたかったようにも思える行為。

正直、迷惑以外の感情はなかった。……あの時からか。部活に出てもいいかなって、思い始めたのは。

「もしかして……それって部室に飾ってる絵のことですかっ？」
突然、距離を詰め寄ってきた内村。驚き、無言のまま首を縦に振った。
「あ、あれって、誰が描いたんですかっ？」
あれ、っていうのは、やっぱり『あれ』だよな？
頭に浮かんだのは、部室の奥に無造作に置かれている、一枚の絵だった。
公園から見えた空を、ありのままに描いたものだ。これといって、見るべきところもない、フツーの絵。
「ありゃあ俺だ。知らねえけど、三咲の奴がやたら気に入ったみたいでさ。うちに持って帰ってもしょうがねえし、あげたんだよ」
「気に入りますよ！　私も、前から綺麗な絵だなって、ずっと思ってたんです。先輩、才能ありますよ！」
よほど興奮しているのか、今の内村からは、とても普段のような臆病なウサギのイメージを感じなかった。とりあえず、才能あるなしは置いとくとして、褒められたら、やはりうれしい。顔が少し緩んだ気がする。
「あんがと。内村にも、気が向いたら、なんか描いてやるよ」
「は、はい！」
顔を赤くしたまま目を細め、とても楽しげにはにかむ内村はかわいい。もちろん、そんなことで恋愛感情が芽生えたりはしないが。
「にしても、飛行機作りなんて、かったりいなぁ」
「そうですか？　私はわくわくしてきましたけど」
「マジか？　かったるいだけだぞ」
「駄目ですよ、そんなこと言ったら。頑張りましょうよ！」
「へいへい。ガンバリマスヨ」
他愛もない話は、いくらでも続いた。それは、とても楽しいし、ほのぼのとするものだ。退屈なのだけれど、退屈ではない。
それからしばらく。一つの分かれ道に差し掛かった。それを見つけ、内村は小走りで分かれ道まで行った。振り返ると、彼女の茶色

い髪がふわりとはねる。
「じゃあ、私の家、こっちなんで。お先に失礼します」
「おう。また明日な」
「はい！」
手をふってくる内村に、軽く片手を上げてやる。それを見て、内村はうれしそうにはにかむと、坂道を駆け上がって行った。
さて、いくか。
「そうか。まさかとは思ってたけど、蒼也にはロリコンの気があったらしい」
不意に聞こえた声に、帰路につこうとしていた足が止まる。後ろを振り向くと、そこには漆黒の長い髪をなびかせながら、蒼く光る目で俺を捉える、一人の人物がいた。
「空」
呼びかけにうっすらと微笑んだ空は、こっちに向かって歩いてくる。それほど距離が離れていたわけではないので、比較的にすぐにやって来た。
「誰がロリコンだ。誰が」
「キミだよ、キミ」
空は楽しそうに、びしびしと、人差し指で俺の胸を何回かつっついた。白く、細長い指の先で、きれいに整えられて爪が光った。
「つーか、どこをどう見たら俺がロリコンになるんだ。こう見えても、俺の好みはグラマーで年上のお姉さまだ」
「なら、私のルート？　ここで一気にフラグ立てができるかもしれないのは確かだけど……」
「全力でパス」
「なんだ、つまらない」
空はそう呟くと、胸から指を離し、そのまま己の唇に持っていった。淡い桃色の唇は、人工的な要素など何も感じさせない、自然の美しさを孕んでいる。
「晴ちゃんとずいぶん仲良さそうだったからかな。どう考えても、

晴ちゃんはロリ顔だし」
「それだけの理由かよ……」
本当にあきれる。俺にとっては小学生の頃からの付き合いだが、いまだに性格が読めない存在。それが狩野空だ。
「俺は別に、ロリコンじゃ、」
続けようとした言葉が、出なかった。いつの間にか、空の顔がドアップで視界に入っていたからだ。少し、どきっとする。
イギリス人だか、フランス人だかのクォーターである空は、豊満なスタイルの持ち主で、顔が抜群に整っている。その上、隔世遺伝なのか、目が蒼い。そんな日本人離れした姿に、唯一日本の血を引く証にも見える、長い黒髪が、驚くほどはえて見えた。小さい頃から、時々かわいいと思ってはいたが、まさかここまでの美人になるとは思ってもいなかった。一年の時、同じクラスで親しくなった裕也曰く、『ファンクラブが存在する』ほどらしい。そんな奴に、こんな吐息がかかる距離まで詰め寄られてみろ。俺じゃなくても、顔ぐらい赤くなるさ。
「……近い。離れろ」
やっとのことでひねり出した言葉に満足したのか、空は艶かしい笑顔で俺から離れる。
確信犯だ、こいつ。
「お前、わかってやってるだろ」
「さてと、何のことかな？」
あくまで白を切るらしい。それならば、と。無言でつき返すことにした。
「……」
「……」
「……」
「……」
ああ、あれだ。その、なんて言うか、気まずい。
空は笑顔のまま、俺から視線をずらさないのに、口を開かない。

俺はただ延々と空の顔を眺めているだけ。気まずくないはずがない。
「……」
「……」
そんな笑顔で俺を見つめないでくれ！　なんだか、無性に罪悪感が沸いてくるぞ！
「……すいませんでした」
「よろしい」
一体、この一分弱は何の駆け引きだったのだろうか。
しょんぼりとした俺を見て、「ふふん」と、満足げに鼻を鳴らす空。その姿を見て思う。幼い頃からまったく変わっていないものだ、と。
そもそも、空は小さい頃からこうだった。人を陥れるのが好き、というほどではなかったが、主導権を握るのを好ましく思っていたのは間違いない。そう、それは忘れもしない、付属一年生の春。他の中学へ俺が転向する前の話だ。
「告白をされた」
帰り道、空は生まれて初めて告白されたという事実を、告白してきた。真っ白い便箋を、右手でひらひらとさせ、見せ付ける。どうやら、ラブレターをもらったらしい。相手は三年の先輩で、ラグビー部の部長だった。
「へぇ、なんかすげーな」
晩飯の献立を考えることに夢中だった俺は、いかにもどうでもいいですよ、と態度で返してしまった。話し相手が、空だということを忘れていなかったのなら、もっと真剣に聞くか、もしくは笑い話に持っていっていただろうに。なんて、失態。
狩野空と天海蒼也は、ただの友達ではなかった。親友、なんてものじゃなく、だからと言って、恋人だなんて、あるはずもない。
悪友。
それが、妥当な表現。
「断るの、一人じゃ心細いから、一緒に来て欲しい。立っているだ

けでいいから」
「おう、別にいいぜ」
から揚げにしよう。心に決めた瞬間に、出された要求だった。二つ返事でオーケーを出したことが、まだ間違いであるとは気がつかない。から揚げ……恐ろしい子。
翌日、指定された場所に二人で行くと、待ち構えていたのは、巨人。当時とは言え、俺の二倍ほどあるんじゃないか、と疑いたくなる身体は、圧倒的な存在感を放っている。幸運なことに、そのトロールは、空に恋をしていた。そう、俺は必殺のカードを、切り札を持っていた。さっさと差し出して帰ればいい。そう思った矢先、あろうことか空はとんでもないことを口走ったのだ。
「すいません、先輩。私、この人と付き合ってるんです！」
……ホワァット？
目をぱちくりとさせ、固まってしまったトロール部長。ギギギ、と音がしそうな動作で、首を傾け、俺の姿を上から下まで満遍なく見回す。そして、
「うあぁぁぁぁ！」
それまできちんと『そこ』に存在していたはずの俺の身体は、宙を舞っていた。背中に重い衝撃が走り、「ぐげぇ！」と気持ちの悪い声をあげる。どこか、自分を客観的に見れた。それほどまでの振動。ほんのちょっと、意識を失っていたほどだ。
目を覚ますと、トロール先輩は、すでに去ったようで、その場に残されたのは俺と空の二人のみ。痛む背中を我慢しながら、空の顔を覗くと、その顔には笑顔が張り付いていた。口元を手で押さえ、必死で笑いを抑えている。
これは、天海蒼也が狩野空という人物を再認識した一幕。
「どうした？　なんだか、青ざめてるけど」
不思議そうに、俺の顔を覗き込む空。
誰のせいだよ、誰の。
「ま、いっか。それはそれとして、麻耶から聞いたよ」

かばんのポケットから携帯を取り出して、俺の前で開いた。そこにはメールの文面が映っていて、何が書いてあるのかまでは、一瞬ではわからない。でも、今日の飛行機作りについてであろう事は予測がついた。
「久しぶりに部活らしいことができるね。副部長として、心から嬉しく思うよ」
「そーだな」
やる気なさげに答え、かまわず歩き出そうとすると、空は携帯を直し、横に並ぶ。
「待って、蒼也。家、近くだし一緒に帰ろう」
「別にいいけど、用事はもういいのか？」
「うん、もう済んだ」
二年に進級してからか。空は何かとつけて忙しくなっていた。部活にも週一回顔を出せばいいほうで、五月なんかは一ヶ月近く顔を見せなかったくらいだ。なにやら、重要な用事があるらしいが、詳しいことを知らない。前に聞いた時、うまい具合にはぐらかされたので、聞くのは止めた。
「楽しみだなぁ」
「なにが？」
「飛行機、飛行機」
両手で通学かばんを持ち、振り上げながらその場で一回転。飛行機のつもりなのだろう。自分の顔が、みるみるしらけていくのがわかる。
「今まで部活らしいことをしなかったのがおかしいんだよ。なぜあんな部活に部費が出ていたんだ。今さらながらに疑問だ」
この疑問はもっともなものだろう。美術部なんて、正体不明の部活にも部費は出ていた。去年の四月、活動を開始してから、一度も支払われなかったことはないという。
「麻耶の人徳と、成績のおかげじゃないか？　学年でもトップテンに入る成績保持者が部長なら、当然だろう」

「プラス、トップスリーに名を連ねる狩野空さんもいらっしゃいますから、だろ？」
その上、一年生部員である工藤雅史は不動の学年一位。
俺の言に空は、「まあね」とでも言いたげな顔を浮かべる。
「確かに、うちの部は成績優秀者が多いのかもね。蒼也だって、けっこういいじゃないか」
「普通だよ」
ちなみに、もう一人の部員である、一年の内村晴については黙秘しておこう。これは、彼女の威信に関わることだ。
「ふふ、中学校の頃は、あんなにも教員に迷惑をかけてばっかりだったのに」
「よせよ。俺たちはもうガキじゃねぇだろ」
「お互い様」
こんな、どうでもいい会話の中でも、ふと思う。俺たちは、もう子供ではない。高校生で、立派な大人で、責任を持つべき、一人の人間なんだと。
「……私たちはまだまだガキだよ」
まるで心を見透かしたかのような空の言葉に、苛立ちを感じた。スコップで掘り返すように、じわじわと、心が土中からあらわになる。
幼いながらも、天海蒼也の面影を残す少年が泣いている。大声を上げて、両手で目を抑え、懇願する。何度も、何度も。何度も、何度も。
「……ちがう」
力無きささやきは、果たして、空の耳には届かない。
「あの時こうしていればよかった……って？」
「……」
反論がしたいのに、言い返せない。握った拳は震え、呼吸が荒くなる。はぁ、はぁ、と。いつもなら、なんとも感じない磯のにおいですら、今の息苦しさの原因となっているという錯覚。

「蒼也が何したって、変わらなかった」
「黙れよ」
立ち止まり、空を射殺さんばかりに鋭く眼光を光らせた。それでも、空は怯む事無く、じっと凝視する。
「ちっ」
視線をずらし、すでに近くまで迫っていた分かれ道まで歩く。片手を上げるだけで、振り返ることもなく、じゃあなとも言わず、進んで行く。
「蒼也」
名前を呼ばれたが、振り向くことはしない。と言うより、まともに空の顔を見れなかった。罪悪感、とは少し違う。口調に棘はあるが、空が自分のことを気にして言ってくれていることにくらいわかる。『友達が心配してくれている』という事実を受け入れない、自分自身を、自責の念が押しつぶしていた。
「……んだよ？」
やっとの思いで搾り出した声は、恐ろしく思うくらいに、か細い、弱弱しい声だった。今にも泣いてしまいそうなことを、伝わらないことを祈る。
「ごめん」
空はきっと頭を下げた。そういう奴だ。昔ながらの付き合いは伊達なんかじゃない。つとめて気付かないふりをして、平静を保つ。
「少し、言い過ぎた。……誰よりも過去にこだわってるのは、他でもない、私だ。こんなこと言うなんて、さ」
気がついてないとでも、思ってるのかよ。
誰よりも、空が嘆いたことを、俺は知っていた。何もできない自分を呪っていたことも、全部、全部、わかっていた。
空が謝ることなど何も無い。自分が弱いだけ。
『いつまで過去を引きずっているんだ』
そう、己の代弁をしてくれている空には、感謝こそすれ、怒るなんてあるはずもない。

けれど、傷口に塩を塗られた。そう、感じてしまう。
「私のせいで、いやな事思い出させた。だっていうのに、……一つお願いがあるんだ」
「我侭でごめん」ポツンと吐いた空に、違和感を覚える。狩野空という人物は、幼い頃から、言いたいことは全て言う性分だった。それが自分の意見なら、相手がどう思おうと、主張する。そんな人間なのだ。
だと言うのに、今の空は言いにくそうに、口ごもっていた。自分のことを気にしているようには思えなかった。
「飛行機の件、やる気を出して、なんてことは言わない。さぼったって全然いい。ただ、麻耶にそういった姿を……見せないでほしい」
「……」
なんで？　とも聞くことなく、無言で聞き入る。声の端が、かすかに震えていた。
「理由は、まだいえない。知りたかったら、自分で調べて。ただ、麻耶はそれなりに蒼也を信頼しているし、私だって、蒼也が頼りになる人物だって知っている。……それだけ」
去っていくような足音が、耳に入る。三咲が飛行機にこだわる理由。きっと、いくら考えても答えは出せない。答えを得る理由も無い。びくびくと、なり続ける心臓を、胸の上から押さえつけ、振り返ることもなく。ただ、空の気配が消えるまで立ち尽くす。
夕暮れに染まっていた空に、少しずつ蓋が閉まっていくのを感じた。

2. 夏の日

飛行機をつくろうなんてばかげた話を聞いた翌日。
毎朝の習慣か、いつものような余裕を持っての登校が仇となった。教室に入り、すれ違うクラスメイトたちと挨拶を重ねる。いつもの日常。何の変哲もない、いつもの朝だ。
そんな俺が席に着くやいなや、『奴』は隣のクラスより突入してきた。手には丸められた画用紙が数枚。その顔を拝んだ瞬間から訪れていた嫌な感じが、実態をもってますます具現化する。
「見て見て！　あたしと工藤くんの力で、完成したのよ！」
大声を上げた三咲は、あろうことか俺の机の上に画用紙を広げだした。先着していたマイバッグは隣の机にほっぽり出される事となる。こっちとしては非常に困るが、こうなってしまったらもう止めようがないことぐらい承知済みだ。あきらめてため息をついていると、広げ終わった三咲が満足げに胸をそらしていた。
「……なんだこりゃ」
それが、正直な感想だった。
「見てわかんない？　設計図よ。設計図」
確かに、そう見えないことも無い。いや、一度そう見てしまうと、もう他の何でもなくなった。
一枚目は飛行機の全体図。コックピットだろうか、ラグビーボールのような形の楕円があり、その前後から伸びた柱が上で一つの柱と繋がり、その柱の先端、つまり最後尾に十字型の翼がついている。そして、一番目を引く部分である大きな翼。二つのプロペラを中心よりにくっつけたそれは、この飛行機の目玉とでも言えそうな部分だ。
二枚目以降は、細かい部分のもの。きちんと縮尺や長さまで精密に書いてある。とても、一日で作った出来とは思えない。
「で、これを見せて、俺にどうしろと」

「別に？　副部長として、見といたほうがいいかと思って」
画用紙十数枚にわたる設計図を一通り全て広げ終わると、三咲は再びそれを筒状にまとめた。ガサガサと大きな音が鳴る。ただでさえ三咲のせいで目立っていたというのに、教室の中でそんな音を立てた俺たちはきっと、かなり目立っている。そう思ったら最後、周りの視線がどんどん痛くなってきた。
「じゃあ、今日も放課後は部室に集合ね」
言い終わると、三咲はすかさず教室を出て行った。
せわしい奴だ。少しは大和撫子の心を持て。きっと今の三十倍はもてるぞ。なんて、心中で悪態付くぐらいは許されるだろう。
「今のって、三咲さんだよな？　どしたの？　なんか慌ててたみたいだけど」
三咲が教室を出た直後、登校してきた裕也は通学かばんを片手に、隣の席までやって来ていた。どうやら、彼は廊下で疾走する三咲とすれ違ったらしい。
いかにもスポーツマン、といった感じで、左手で短い髪を掻き揚げた裕也は、豪快に自分の席についた。俺の右隣の席である裕也は、一年次から同じクラスだった。最初こそ、口をきくこともほとんどないだろうと互いに思っていたのだが、俺たちは以外にも気が合う。趣味が同じとか、そんなものではない。雰囲気というかなんと言うか、とにかく馬が合うのだ。
「ああ、ちょっとな」
「相変わらず、大変そうだね。だから幽霊部員でいいから、サッカー部に入ったほうがいいって、誘ったのに」
「まったくだ」
裕也とここまで気が合うなんて、一年の初めの頃、転校してきたばかりの頃には思いもしなかった事実だ。空が「部活の人数が足りなくて困ってる」などと言ったのが、悪魔のささやきであるということを、あの時の自分に教えてあげたい。
なんて、いまさら後悔してももう遅いことくらいわかっている。

部活を乗換えでもしたらきっと闇討ちに遭う。主に三咲とか三咲とか三咲とかに。
「まあ、天海君なら、いつでも大歓迎だから。掛け持ちもオーケー」
声のした方を見やると、いつの間にやら裕也の横に立っていた甲斐が、眼鏡を押し上げ、見下していた。いや、訂正。裕也曰く、見下しているわけではないらしい。生まれつき目が悪く、常に目を細めていたせいで、誤解を受けることが多いとの事。本当は心の優しい女の子、だそうだ。
「おっす、ふみ」
「おはよ」
裕也が笑顔で片手を挙げ、それに無表情で答える甲斐。甲斐は、サッカー部のマネージャーだ。見る限り、仲が良いようにはとても見えないが、甲斐は嫌いな相手はとことん無視するらしいから、案外二人の関係は良好らしい。
「ま、いまさらサッカー部に入るつもりはねぇよ。悪いな裕也、甲斐」
「いや、ふみの言うこともっともなんだよね。蒼也って、細いけど、体育の授業見るかぎりじゃあ、運動神経はいいしね」
「ええ。それになにより……」
甲斐は俺と裕也の顔を交互に見比べ、「ふふん」と、鼻を鳴らした。
「うちの部には花がないから」
「はい？」
甲斐の言葉の意味が汲み取れず、思いっきり間の抜けた顔をしてしまったと思う。当の甲斐は、そんな俺の顔を見て笑い、裕也は「なるほど」と呟いた。
「何がなるほどなんだ？」
甲斐が何かを答えようとしたが、予鈴が鳴ってしまい、二人とも自分の席へと戻っていってしまった。隣に座る裕也に、事の次第を問いただしたが、結局はのらりくらりとかわされ、結局何が言いた

かったのかわからないまま、授業は始まった。

放課後。

足の赴く方に身を任せていると、自然と部室へ辿り着いた。中に入ると、目の下に大きな隈を作った工藤が、亡霊のように定位置についているのが目に入った。

「……おい、大丈夫か？」

俺の言葉にわずかに反応したのか、工藤はいつもの仕草で眼鏡を押し上げて答える。が、ずれた。ブリッジに当てるはずだった中指は直で眉間を捉えていた。けれどそんな自分には気がつかず、工藤は腕を下げた。

「ええ、平気です。平気ですとも」

まるで連れて行かれる間際の子牛のように、哀愁漂うその姿は見ていて痛々しい。大方の見当がつくから、なんとも哀れ。

放心している工藤と気まずい雰囲気で佇んでいると、次に部室を訪れたのは空だった。

「珍しいな」

「まあね。今日からは私も、極力参加しようと思ったんだ」

無駄のない動作で、俺の斜め前の席に座る空。なぜだか、その姿を目で追ってしまう。昨日の会話が原因なのか、それとも。

「おまたせー！」

三咲の侵入で、思考は一時中断された。

見やると、三咲の後ろからは申し訳なさそうな顔で、内村もついてくる。

内村はいつものように対面の位置に、おずおずと腰掛け、対照的に三咲はずんずんと奥に進む。ホワイトボードに磁石で、今朝見せに来た設計図の表紙を貼り付けた。工藤の肩がわずかに揺れたのは気のせいのはずだ。

「さて、昨日も言ったけど、あたしたちの今後の目標は飛行機の作成！　それについて、昨日工藤くんと作った設計図を持ってきたわ」
「異議あり。『工藤くんと』、じゃなくて、『工藤くんが』だろ」
「まず、材料を買ってこなくちゃいけないわね」
俺の発言完全無視。横を見やると、工藤は「いいんですよ」と儚く呟いた。
「大体はホームセンターで買えるけど、さすがにＳＤＶ機構は……」
「ＳＤＶ機構？　なんだそりゃ」
「まあ、そこらへんはおいおい考えるとして」
聞いてねえよ、こいつ。
別にどうしても知りたいわけではなかったが、気になるものは仕方がない。どうしようもなく途方にくれていた俺の肩が軽く叩かれる。振り返ると、工藤が助け舟を出してくれた。
「先輩は先に帰ったから知らないみたいですけど、部長は『鳥になろうコンテスト』に刺激されたみたいなんです」
「ああー……」
「ええ、テレビ局が結構前からやってる企画なんですけど、自作の飛行機で飛行して、その飛行距離を競う大会です」
工藤が言うには、滋賀県琵琶湖にて、毎年行われるそれは某テレビ局夏の風物詩ともいえるものらしい。もちろん、俺だって放送を見たことが少しはある有名な番組だ。
「マジで？」
「大マジです」
ちなみに、この設計図を書いたのがやはり工藤だと知ると、哀れみを浮かべた顔でこんどはこっちが肩を叩いた。工藤もそれを振り払おうとはせず、いいんですよと再びの苦しい笑顔。見ているこっちが痛々しい。
「そもそも、そんなに苦労はしてないんですよ。某大学のホームページにあるのを、ちょっと改良しただけですから」
毎年、その大学はコンテストに参加している。そして、成功した

飛行機の設計等を自らのホームページで公開しているそうだ。さすがに、一高校生に一から飛行機を設計するのは厳しかったらしい。さすがは工藤ってことか。

とはいえ、飛行機、ねえ。

設計図を見させられたせいか、やけに現実味を帯びてくる事象。ポツリと、自然の子千葉が漏れた。

「ますますうちが何部かわからねえ」

「はは、ですね」

二人で部屋の最深に目をやると、当の三咲はぶつぶつと一人の世界に入り込む。そんな三咲に意見できる存在など、この世でも数人しかいない。

「麻耶。とりあえず、今日は何を？」

この場にも一人。国民的アニメ風に言うなら、三咲麻耶の心の友、狩野空だ。もっともあのアニメで、ガキ大将の心の友とは、ものすごく現金な存在だったが。

「そうねぇ……。じゃあ、みんなでホームセンターに行きましょうか。大きなのは発注してもらって、持てそうなものは天海くんが持ってくれるでしょうし」

「異議あり。俺は今日用事がある」

「却下。異議を認めません」

この部における副部長の役職というのは、存外、地位が低いものらしい。実は重要な用事などなかったし、ここまで潔いと不快さもあまりない。皆がかばんを持っ立ち上がったのに合わせて、俺も腰を上げた。

と、部活メンバーで部屋の入り口を出たところで、三咲は何かを思い出したかのようにはっ声を出した。

「ごめん、ちょっとトイレ！」

そう言って駆け出していく。ったく、トイレぐらい済ませて来いよ。なんてぼやくが、『一応は』女の子。少しは恥じらいの精神を持っているのだろうと、納得する。もっとも、持っているなら「ト

イレ！」なんて単語は叫ばないのかもしれないが。
「つーか、マジで造るんだな。俺はてっきり何かの冗談かと思ってたぞ」
誰に言ったわけでもなかった台詞だったのだが、一番近くにいた空が頷いてくれた。
「麻耶はやらないことは口にしない。それくらい、入部して一年もたてばわかるはずだけど？」
「ああ、嫌というほどな」
俺が入部して一年とちょっと。その間に、三咲の口が導いた災いは数知れない。というよりも、ここは何部だ？　と疑いたくなるような内容ばかりだった。
千羽鶴しかり、タイムカプセルしかり……。
「おまたせ！」
しばらくして、かばんを持った三咲がさっそうと登場した。その手に部室の鍵を握り締めている。
「さ、閉めるから、早く出て出て！」
全員がかばんを持ち、廊下に出たのを確認すると、三咲は鍵を閉め、鞄の脇のポケットにしまう。
「お金は？」
唐突な空の質問に、「もちろん」と、三咲は満面の笑みで答えると、茶色い封筒を俺の眼前に差し出した。結構な厚さだ。
なるほど。
今まで使うことのなかった、貯めに貯めた部費の在り処はここだったか。

学校から三十分ほど坂を上ると、町内で一番大きいホームセンターに到着した。自動ドアが開いて、中からは人工的な涼しさが漂ってくる。実に心地が良い。

「さぁ。行くわよ、晴ちゃん！」
「え？　わっ、待ってくださいよ！」
麻耶は内村の手を引いて駆け出した。歩け。他のお客さんに迷惑だろう。
「いいじゃないですかー。あの元気さが部長のいいところなんですからー」
「と、言いたいところだが、あやつはたった今メシを食ったところだ。食い終わってすぐに走ると腹を壊す」
此処に来る途中、三咲はアンパンを一つ、クリームパンを一つかじっていた。どちらも低カロリーをうたっているダイエット商品だ。聞けば、「晩飯」だそうだが……。確かに、夏だからまだ明るいとは言え、もう五時半。早い家ならば食べていてもおかしくない時間だったものの、さすがに色々心配だった。
「先輩も、部長のこと心配なんですね」
尻すぼみな言葉。
工藤は歩くことにより回復しかけていた体力を消耗したようだ。虚ろだった瞳は、さらに疲労という属性を追加していた。
心から冥福を祈ります。
「蒼也？　……キミは、何をしてるんだ？」
「見てわからんか。合掌だ」
両手を合わせ、工藤の方を向いて目を瞑る。はたから見ればおかしなものなのだろう。もっとも、俺自身は半分本気だが。
「バカなことしてないで、早く行こう」
二人を追って空も奥へと進んで行く。俺もすぐにも続こうとしたけれど、放心状態の工藤が気にかかった。
顔を上げたその目は、焦点があっていない。天井にある蛍光灯を見て、違う世界にトリップしているようだ。
「……」
すまん、かける言葉が見つからない。
再度合掌をして、空の後を追った。

二人を見つけたのは、木材が置いてあるエリアだった。様々な種類の木や、大きさが取り揃えられている。当の三咲は、通りかかった店員にあれこれと質問しているようだ。店員とは意気投合しているのかいないのか、なにやら白熱している。
「あー、もう！　埒があかないわね」
店員と話し終えた三咲は、そんな愚痴をもらしていた。近づいて、先ほどまで三咲が手にしていた木の板をさわりながら、口を開く。
「今度はどうしたんだ」
「軽くて、強度の強い木を探してるって、聞いたのよ。何に使うんですかー？　って聞かれたから、飛行機を作るんです、って答えたのよ。そしたらあの店員、笑ったのよっ？　ふざけてるわ！　こっちはいたってまじめなのに！」
「そりゃ笑うだろうよ。高校生が飛行機造ろうなんて、馬鹿げてる」
「馬鹿げてない！」
今度は俺に噛み付いてきた。ったく、こいつは騒がしくないと生きていけないのだろうか。いっそのこと耳をふさいでしまいたかったが、そうしたらもっとうるさくなるだろうことが予測できたので止めておく。
「馬鹿げて、ないよ」
「え？」
それは一瞬だけ見えた、太陽を隠す雲。
「部長」
工藤の声が、俺たちの間に割って入る。そっちに気を取られている間に、もう三咲の顔はいつもの物に戻っていた。
「木材じゃなくて、今回は発泡スチロールです」
「え、マジ？」
口を開いたのは俺だ。発泡スチロールと言えば、カップ麺の容器、保冷用の白いやつなどしか頭に浮かばず、とても強度が強いイメージがなかったからだ。
「同じ発泡スチロールでも、製法が違えば用途も違うんです。例え

ば、カップ麺の容器などは通称ＰＳＰ。ポリスチレンペーパーと言い、耐熱性が低いので合成樹脂素材を表面にコーティングしているものが多いですね」
脳内に、某有名ゲーム機が頭に浮かんだが、もちろんそのＰＳＰではない。
「で、今回使おうと思うのはＸＰＳ。押出ポリスチレンです。あまり目立ちませんが、住宅の断熱材とかに使われてるんですよ？」
発泡スチロールでできた家。頭の中で、その家はものの見事にぼろぼろと崩れていった。
言い終わった工藤はお決まりのように眼鏡を押し上げる。さすが、美術部の？歩く辞書？。通り名は伊達じゃない。
「うん、そうしましょう！　店員さーん！」
意図的に、三咲は先ほどと違う店員さんを呼んだ。アルバイト臭がプンプンする、金髪の兄さんに、ＸＰＳについて聞いている。
そういえば、と。ここに来てからずっと影の薄い内村を探してみた。左右を見回してみたが、どうやらこの辺りにはいないようだ。まさか、高校生にもなって迷子……なわけないか。
とりあえず、暇つぶしをかねてぶらぶらと歩き回ることにした。俺自身あまりこういう所に来ないから、電化製品やらなんやら、本当にいろいろと揃っているのがものめずらしいらしい。
「あ、先輩！」
植物の肥料などが置いてある場所で、その声は聞こえた。声のした方に目をやると、内村が背伸びをして、こっちこっち、と手をふっていた。
「どうした？」
近くまで小走りで行くと、そこには小さな水槽や虫かごがいくつも並んでいた。内村の目の前にあるのはウーパールーパーの水槽だ。
「かわいいですよねぇ」
指を水槽に押し当てながら、かわいらしく頬を緩ませる内村。自然と、俺の眉間にしわがよる。

「かわいいか？　俺には白いトカゲにしか見えん」
「そんなことないですよ。とってもかわいいじゃないですか」
内村はにっこりと、ウーパールーパーに微笑を無償で提供していた。そんな内村の頭をポンポンと叩くと、内村の頬が少し赤く染まる。
「まぁいい。それより、買い物終わりそうだから、さっさと行こうぜ」
「……はい」
水槽に向かって、ばいばい、と手をふった内村はゆっくりとした動作で立ち上がり、俺の横に来て、一緒に歩き出した。
「なんだか、楽しみです」
「そうか？　かったるいだけな気がするが」
「そんな事ないですよ。きっと楽しいです。……先輩と一緒なら、いつだって」
「ま、そうだな。俺はともかく、三咲も空も、一緒にいたらおもしろいかもな」
三咲は騒がしいけれど、一緒にいて退屈しないのは本当だ。空だって、よくわからない性格をしてるが、楽しい奴だってのは間違いない。
「ち、違います！　私が言いたいことはですね、」
「おっそい！」
俺たちがもといた場所に戻る前に、三咲が先にこちらを見つけ、駆け寄ってきた。内村に一瞬目を奪われたが、すぐに叱責に入る。
「へいへい。待たせてすいませんね」
三咲は無言でレジ袋を手渡してきた。そういえば、荷物持ちであることをすっかりと忘れていた。受け取った袋の中を見やると、なにやら見慣れない工具が入っているのがわかる。
「なんだこりゃ？」
「ヒートペンよ。知らないの？」
自慢げに胸をそる三咲だが、チラリと工藤を見ると、苦笑してい

た。たった今手にした知識をひけらかしたいだけなのが目に見えて分かる。
「発泡スチロールを切るのに使うの。その金属のとこが熱くなるのよ」
三咲の顔がすぐ近くまで寄ってくる。思わず、顔を放した。
「中古品らしいから、箱はないけど、十分使えるわ」
「ま、いいや。それで？　ＸＰＳ、だっけ。どれくらい買ったんだ？」
「うん、まあぎりぎりの枚数ね。失敗は許されないから、気をつけること」
ポケットから取り出した封筒の端を持ち、三咲は数回振った。何も入っていない、というアピールだ。
「あれ？」
歩きながら、ん？　と首をかしげる。
「翼だけじゃ飛行機なんて無理だろ。プロペラとか、その辺はどうするんだ」
「とりあえず、動力はＳＤＶ機構を採用したわ」
自信満々に三咲は胸を張った。ここに来る前、部室でも言っていた単語。結局、意味を教えてもらっていないから、チンプンカンプンだ。
「ＳＤＶ機構って？」
「……工藤くん、任せた」
どうやら、三咲も知らないらしい。再び、俺が手を伸ばさずとも、辞書がめくれ始める。
「参考にした大学が用いた……ペダルみたいなものと考えてください」
補足すると、と工藤が付け足した。
ＳＤＶ機構とは自転車のペダルのようなもの。従来のものと比べ、１サイクルで機体にかかる力が圧倒的に違う。自転車などでもそうだが、通常は踏み込んだ力の全てが使われるわけではない。しかし、

ＳＤＶ機構は円運動にロスが少なく、踏み込み力のほぼ１００％が使用されるとのことらしい。
「と、言うことよ」
「お前が締めくくるな。つーか、結局そのなんたらかんたらってのはどこで仕入れるんだよ」
痛い所をつかれたのか、三咲はひるんだ。あーだのうーだのとのた打ち回り、最終的に「気にするな！」と一括。はっきり言って意味不明だ。
そうこうしているうちに、すぐ入り口に辿り着いた。開いた自動ドアから、一気に外界の熱気が体中に染み渡る。その熱気にだるさを感じながら、外に置いてあった自販機の近くに歩み寄る。
「あちぃ……」
ズボンのポッケから財布を取り出しつつ、そう漏らした。
「この季節まで長袖のシャツでいるのが悪いのよ。格好いいとでも思ってるの？　それ」
「へいへい、うっせーよ。今日はこれで解散か？」
「うん。今日はこれで終了！　作業は材料が届いてからだから、とりあえず土日はお休みね。これからは過酷になるから、明日、明後日はゆっくり休むこと！」
そう告げると、三咲は猛スピードで坂を転がり落ちて行った。この暑さで、まあ元気なこと。ほんの少しだけ、マツゲ一本分ぐらい部長をリスペクトした。
ほっと一息つき、財布から幾枚かの硬貨を取り出して、投入口に突っ込んだ。ブラックコーヒーと迷ったが、有名な炭酸飲料のボタンを押す。
「ほらよ」
一言そえて、熱でふらふらになっている工藤に、よく冷えた缶を投げ渡した。
「ありがとうございます」
ぷしゅっ。

子気味の良い音が出て、工藤が口にしたのを確認すると、今度は内村の方を向く。
「内村はなんにする？」
「へ？　いや、い、いいですよ！」
「先輩がおごるって言ってんだから、遠慮すんなよ」
「え、えっと、ありがとうございます……」
おずおずと、りんごジュースを指差した。
「空はいるか？」
お金を入れながら、横にあるベンチに座っている空に問いかけた。
「悪いが、遠慮するよ。お茶、持ってきているし」
「そっか」
取り出し口からジュースを出し、傍にいた内村に手渡した。さて、俺は何にしようか考え、お茶をチョイス。
かがんで取り出したペットボトルのふたを回し、口をつけた。
「にしても、三咲も元気だな。普段からああだけど、なんかいつも以上に張り切ってるように見える」
結構飲んだとは思ってはいたが、見てみればペットボトルの半分ほどを一気に流し込んだらしい。
「……麻耶は、飛ぶことが夢らしい。お父さんが見ていた景色の片鱗。それを味わいたいんだって」
「親父さん？」
紫色をした水筒を空け、空はお茶を一口含んだ。
「飛行機のパイロットだったらしいよ」
「へぇ、すげぇんだな」
「うん」
かばんに水筒を直すと、空は立ち上がった。
「さて、私は用事があるからこれで。また部活で」
「おう」
空はにっこりと笑うと、振り返って坂道を下っていった。
俺も帰ろうかなと思い、残っていたお茶を一気に飲み干して、ゴ

ミ箱に投げ入れた。きれいな弧を描いたペットボトルは、ゴミ箱のふちに当たって、中へと吸い込まれる。
立ち上がって、ふと違和感。後ろを見ると、ベンチに残されたビニール袋。
「あー、これ、学校に持って行くべきかな？」
「月曜に持って行けばいいんじゃないですか？」
答えた工藤は、俺の真似らしい。空き缶をゴミ箱に入れようと、わき目もふらず集中していた。なにも、そこまで集中しなくてもいい気がするが、あえて黙っていた。
内村はというと、いまだにちびちびとジュースを飲んでいる。
「そっか。んじゃ、俺買い物して帰らないといけないから、またな」
「はい」
「お疲れ様でした」
意を決して投げた工藤の空き缶は、見事にゴミ箱の数センチ横を通り抜けて、軽快な音を上げ、飛んだ。

鍵を開け、スーパーの特売品を詰め込んだレジ袋と、三咲から半ば強引に持たされた部活の道具を両手に、自宅へと帰ってきた俺は、靴を脱いできれいに玄関に揃えた。まだ、母は帰ってきていないらしい。
「さっさとすませるかなー」
呟いて、荷物を一旦テーブルの上に置き、手を洗う。それから、ビニールから暑さに弱い物を冷蔵庫に入れた。
んっ、と伸びをしたはずみに、瞳には時計が入り込んでくる。すでに六時半を過ぎていた。
「さて、と」
掛けてあったクリーム色のマイエプロンを装着して台所に立った。天海家、今日の献立は麻婆豆腐。理由は木綿豆腐が安かった。ひた

すら安かった。それだけだ。
　さっき入れたばかりなのにな、と心中でぼやきつつ、冷蔵庫の扉を開けた。取り出したのは今日買ったばかりの豆腐、牛の挽肉、唐辛子。生姜とニンニクも出した。
　まずは下ごしらえと。
　パックから、包丁を使って豆腐を取り出し、それをキッチンペーパーで包んで、軽く押さえつける。それを端の方に置いて……と。次に生姜とニンニクをみじん切りに。どちらも少量余っていたものだから、分けることせず全てを切り刻んだ後、鍋を火にかけ、熱せられるまでしばらく待った。
　鍋から煙が上がっているのが確認できると、弱火にして、キッチンペーパーから豆腐を取り出す。本当は完全に水気を取りたかったようだが、時間が押している。今日はこの不完全な状態で我慢することにしよう。
　その豆腐を手のひらに載せ、もはや慣れた手つきで賽の目状に切っていく。鍋にサラダ油をひくと、ジュッ、と音がした。そこに牛の挽肉と、下ごしらえした生姜、ニンニクを入れ、一緒に炒める。
「ただいまー」
　食欲をそそる音が部屋中に響く中、ドアの閉まる音と、はきはきとした女性の声が耳に届いた。ドタバタと足音がした後、台所に現れたのはこの家の大黒柱兼俺の母、天海真紀だった。
「あ、今日は麻婆？」
「ああ。もうちょいでできるから、冷蔵庫からお冷出しといて」
　母さんの方に振り返りながら、おたまで鍋をかき回す。
「はいはーい」
　母さんはかばんを放り投げ、冷蔵庫から取り出した今朝の残りのご飯を、せっせと茶碗につぎはじめた。
　そんな母を横目に見て、向き直る。料理もそろそろ終盤だ。適当な大きさに切った唐辛子を鍋に突っ込む。そして大本命、豆腐を入れる。ここからは動きをさらに俊敏としなければならない。形が崩

れるからだ。醤油に砂糖、隠し味に味噌を加える。溶いた水溶き片栗粉を全体に満遍なくそそぎ、最後にごま油を少しいれ、火を消した。

「よし、できた」

お椀に麻婆豆腐を盛り付け、すでに真樹が着席している準備万端なテーブルまで持っていった。

「おいしそーっ。いっただきまーす」

母さんは子供っぽい声をあげ、どんぶりの上に麻婆豆腐をのせて、口にかっこんだ。

「おいしい！　また腕上げたわねぇ」

口元を緩ませ、幸せそうにほおばっている姿を見ると、やはりうれしい。微笑ましく母さんを見たあと、俺も箸でつまんで一口。

「お、うまい」

少し手を抜いた割には十分な出来で、自然と口元が緩んだ。

「蒼也さ、なんかいい事でもあった？」

「なんで？」

「なんか、うれしそうだから。ここ最近じゃ、一番笑ってる」

母さんの言葉は、もしかしたら確信をついていたのかもしれない。けれど、特にこれといった回答を示さず、箸を動かし続けた。

「予想以上にうまかっただけだよ」

「ま、母さんには関係ないけど、笑うことはいいことだ。良きかな良きかな」

母さんだって、よく笑うようになった。

このアパートに引っ越してきた当初、まさにこの世の終わりを迎えたかのような、暗い表情を崩すことがなかった。それがどうだろう。今はこんなにも笑ってる。俺にとって、嬉しくなる理由などそれだけでよかった。あとは、地味に部活のことが入っているのだろうが。

ご飯を食べ終わったら、部活のこと、話してみようか。

笑顔でいる母を見ると、それもいいかも、と考えた。

それは、週末の金曜日だった。

3．ただ、日常

週明けの月曜日は、七月の月初めの日でもあった。
いつもの放課後のはずが、今日は非日常の怒声が部室で響く。自分でもあきれるほど、長い嘆息を吐いた。
「だ、か、ら！　あの倉庫、使っていないんだったらあたしたちに使用許可をください、って言ってるんじゃない！」
「使っていないんだったらもらう。そんな子供の思考、吐き気がするな。もっと理由を突き詰めて聞け。『飛行機を造るから』って、まったく。意味がわからない」
「わからないのはあんたよ！　美術部なんだから、飛行機ぐらい造るわよ！　生徒会って、やっぱり無能なのね！」
普通は造らないな、うん。
どちらも一歩も引かない状態が続く。三咲麻耶、という完全無敵の我らが部長様を相手に、拮抗状態を続けているのは、生徒会長。三年の中山百合だった。
二年生の時から生徒会長を勤める、真白学園のシンボル的な存在。強気な印象を与える、つりあがった黒い瞳には、フレームの細い眼鏡がやけに似合う。校則をきちんと守っているのか、肩より少し上で切りそろえられた癖毛は、後ろにはねていて、活発な印象を与えていた。男っぽさが強いものの、美人。その容姿から、校内では男女問わずの人気者。
かくいう俺も、個人的に話したことが何度かあり、いい人であることは重々承知していた。いうなればただただ、面倒くさいだけなのだ。
「使用許可を得たいなら、きちんとした理由を持って来い。もちろん、原稿用紙に書き連ねて来い」
「なんでよっ！　そんな嫌味な性格してるから彼氏出来ないのよ、バーカ！」

「バカバカ言うな。バカがうつったらどうする」
「なによそれ！　あたしがバカだって言いたいのっ？」
「違うのか？」
「っ、この偏屈！　わからずや！　人でなし！　職権乱用！　お前のかぁちゃんでーべーそ！」
わけがわからんっつーの。
再び吐いたため息の先、いつもと同じく正面に座っている内村が、同調するように息を吐いた。
「いつまで続くんでしょう、これ」
「わからん。とりあえず空の到着待ちだな」
この惨状を、二人の口論を止められるのは空だけだろう。期待の一年生部員工藤雅史も、中和を試みて、二人の口論を眺めるうちにダウン。部屋の隅で倒れたまま。
「あの先輩が来ると、いっつもああなるんですか？」
「……まあな。来るって言うより、三咲が連れてきたとき。部活以外じゃ、すげぇ優しい先輩なんだけど」
中山先輩とあまり面識の無い内村に話してやった。
以前から、中山先輩はここによく訪れていた。部費の件や、部活動承認の件など、事あるごとにこの部室にて、三咲と熾烈なバトルを繰り広げているのだ。そのたびに空の仲介があったおかげで何とかなっていたが、今日はまだいない。これからは極力参加したい、と言っていたくらいだし、来ることを切に願うばかりだ。
「いい加減認めてよ！　いつまでも嫌々言うなんて、大人気ないわよ！」
「駄々をこねる方が子供だ」
終わる気配はない。
さすがにかったるくなった。地面に置いてあるかばんを手にしたところで、待ちに待った来訪者が部室へと訪れた。今度は安堵の息を吐いて、かばんを再び地面に置くと、席に座りなおした。
「……またか」

ため息と共に、空の口からはそんな言葉も漏れた。その表情はどこか浮かない。
「あ、空！　聞いてよ、この生徒会長がまた……」
来るべき援軍の到来に、一番歓喜したのはそもそもの元凶、三咲麻耶だった。中山先輩は、空の顔を見ると、まるで苦虫を噛み潰したかのような表情をした。それほど、その存在は脅威なのだろう。
「狩野。私は三咲と話しているところだ。悪いが、口は挟まないでもらいたい」
「なんだ、挟んでほしいのか。私は、まだ何も言ってないんだがな」
蒼い両眼は、冷酷に中山先輩を射抜いた。たまらず、先輩は半歩後ずさる。行為の後に気づいたのか、はっとした表情を浮かべた後、また半歩足を前に進めた。
「それで、一体何の騒ぎだ？」
空は、スマイル百パーセントを浮かべている親友に、騒動の根源について問いかけた。
「ああね。今日から活動を再開する、って言ったじゃない？　でもね、よく考えたら、飛行機作る場所なんて、我が部は所有してなかったのよ。まさか、ここで造るわけにもいかないし」
そして、三咲が連れてきたのが中山先輩だったのだ。
実際には、生徒会室に突撃した三咲の対応に困っていた役員の一人が、手をこまねいたところ、さっそうと現れた先輩にバトンタッチ。そのまま生徒会室で口論しては、仕事に差支えがあるからと、生物第一教室兼美術部室までやってきたらしい。
「あたし、朝から調べに調べまわって、やっと使っていない倉庫を見つけたのよ？　名目上は生徒会の備品置き場だけど、明らかに大きすぎるわ。体育館の半分ほどもあるなんて、はっきり言って予算の無駄。だから、有効活用してあげようと思ったのよ」
三咲の言い分が気に食わないのか、先輩はしきりに舌打ちをする。
「元々、あそこは『小体育館』って事で随分前に作られたんだ。中高一貫教育であるし、必要視された。でも、生徒数の減少に伴い、

まったくと言っていいほど使わなくなった。だから生徒会の備品置き場にしている」
「だったら、あたしたちが使ったっていいじゃない！」
「悪いとは言っていないだろう？　ただ、きちんと理由を説明しろと言っているんだ」
両腕を胸の前で組み、大またを広げて立つ先輩の姿は、女としてはどうかと思ってしまうが、実に男らしい。男女問わず人気があると言う話は頷ける気がした。
「なら、理由さえきちんとしていれば？」
いかにもめんどくさいです、と言った感じに、空は右手で髪の毛をかき上げた。
「あ、ああ」
先輩の顔に動揺の影が浮かんだ。痛いところを突かれた、と表情で示す。
三咲一人を相手にするのならば、有耶無耶にして終れると高をくくっていたのだろう。
「なら、明日までに概要を書いてきます。キチンと。それで、問題ないはずで？」
「……生徒会の協議で決定すればな」
「では、そういうことで」
空のその言葉に、先輩は何も言うことがなくなった。と言うよりも、口で勝てるわけが無いと判断し、黙って部室から出て行ってしまった。
ガラガラガラ、と。
扉が閉まるのとほぼ同時。今日一番の功労者に、三咲が勢いよく駆け込み、そのまま抱きついた。
「ありがと、空！」
体にまとわりつく三咲の頭を、よしよしと言いながら空はなでる。本当に、この二人は仲がいい。俺は詳しい経緯は知らない。そもそも、付属時代――中学時代はこの街から離れていたから、二人の出

会いや関係など、此処一年で見た限りでしかわからないのだ。
「まあ、これで今日は何もできなくなったんだが」
空が「ごめんね」と口にすると、三咲は大きく首を振って否定した。
「いいのよ、別に。どうせ材料だって届いてないんだし、どこぞの役立たずな男よりよっぽどましだわ！」
三咲の言葉が鋭く突き刺さる。顔には出さないように気をつけているが、眉がぴくぴくと動くのが自分でもわかった。
「とんだ災難だな。蒼也」
「まったくだ」
三咲を抱っこしている状態の空に慰められた。
「それで、狩野先輩が書くんですか？」
いつの間にやら、隣にいた工藤が口を開いた。ザ・不死身。
使用許可を求める請求願い、ね。確かに空が啖呵切った以上、妥当な割り当てだ。だが、空の答えは工藤の予想を反したものだった。
「それは、キミの役目だ」
重苦しい雰囲気を漂わせ、空は工藤をその目に捉えた。
世界は核の海に包まれた。救世主はキミだ！　なんてナレーションが、バックミュージックと共に流れてきそうな勢いである。
「俺……ですか」
精悍な顔つきで、空と目を合わせた工藤。そんな工藤を見て、ゆっくりと空の口は開いた。
「もちろん。だって、キミは美術部『書記』だから」
びしり、と効果音がつきそうな勢いで、工藤を指差した空は、被告人に証拠を突きつけた『異議有りっ』でお馴染みの弁護士のように、なるほど、華麗なものだった。
「って、待て待て。いつ工藤は書記になった」
「今。正当な話し合いの結果、採決が完了した」
「いつ話し合いが行われたんだよ。いつ」
「今と言っている。私と麻耶、部長と副部長二人の話し合いだ。異

論は認めん」
　それこそ職権乱用だろう。そう思ったが、自分も副部長であったことを思い出す。職務怠慢とか何とか色々言われそうな雰囲気だったので、言葉を飲み込んだ。
「別にいいですけど、俺なんかでいいんですか？」
　右手の人差し指で、自分の顔を指す工藤。眼鏡がずり落ちているのに気がついていないのは、きっと驚きが混じっているからだろう。というか、部活動に書記って、おかしくね？
「ええ。我が部の未来はあなたにかかってるのよ！」
　三咲が胸をそって、高らかに宣言した。
　どうもこうも、そういうわけらしい。
「じゃ、今日はこれでおしまい！　あたしはトイレ行ってくるから、鍵は開けててていいわよ！」
　かばんを持って、三咲は出て行ってしまった。トイレ行くんならかばんはいらない気がする。やっぱり、あいつはバカなんだろうか。
　そんなことを思っていると、今来たばかりの空がくるん、と反転した。
「それじゃ、私は先に失礼するわね」
「あっと、俺も使用許可申請を書かなきゃいけないんで、これで」
　空が部屋から出て行くと、後を追うように工藤も出て行ってしまった。
　いまだ帰らずに残っている内村は、こっちをちらちらと見ては、下を俯き、また顔を上げて、という動作の繰り返しをしていた。……どうしたのだろう。
「あ、あの！」
　意を決したように、内村の口が開いた。先を続けようと、内村が身を乗り出したその時、部屋の入り口から、年季のある顔をした男性教員が入ってくる。記憶にはない先生だったので、おそらく学年が違うのだろう。
「ここにいたか内村。数学の追試、合格していないのはお前だけだ

ぞ」
「あ……」
心の片隅にもなかったのか、きょとん、とした顔で先生を見つめる我が後輩。そんなかわいい後輩を見て、先生はため息をついた。
「はぁ……。とにかく、職員室で待ってるから、早めに来いよ？」
内村とは目もあわせないまま、先生は部屋から出て行ってしまった。
「え、っとぉ……」
放心状態で、内村は開いたままになっている扉を見つめ続けている。
「ま、そういうわけだな。早く行ったら？　先生待たせたら悪いし」
「……そう、ですね。じゃあ、しつれいします……」
肩をがっくりと落とし、よたよたと歩いていってしまう内村。そんなに追試が嫌なら、きちんと勉強をしていればいいものを。なんて、今さらだな。
最後の一人が部屋を出ると、必然的にこの部屋には俺しかいなくなる。放課後になっても、けたたましく鳴き続ける蝉たちは、まるで休むことを知らないかのよう。そんな蝉たちもさすがに疲れたのか、もしくは今日はこれで終わりなのか。一匹、また一匹と泣き止んでいき、そうして最後の一匹の咆哮も終わり、教室に静寂が訪れた。
いつ以来だろうか。
教室にただ一人。自分の呼吸する音が、やけに鮮明に聞こえた、あの日々。
使い古された机。
折り目のついた教科書。
長年連れ添った筆箱。
視界に映るあらゆるものが、あらゆる影が、訴えかけた。それから逃げるように、投げて、壊して、破いて、もう、何がなんだかわからなくなっていた。

ジジジジジ。
蝉の声で、再び現実の世界を取り戻す。
閉じていた目蓋を押し上げ、ふぅ、と息を吐く。
たらり、と額を伝った汗をシャツの袖でふき取り、首元に手を当て、ゆっくりと動かした。
「……帰るか」
誰に言ったわけでもなく、ただの独り言。勢いをつけてイスから立ち上がり、腕を思いっきり上げて、体を伸ばす。んーっ、と漏れた己の声に苦笑した。
「あら……、天海くん。まだ残ってたんだ」
そこに現れたのは三咲。学校指定のかばんを肩からぶら下げ、扉に手をかけている。
まだ、と言う言葉から教室にある時計を見上げた。いつの間にか、内村が出て行ってから三十分以上経過していた。
「ああ、もう帰るところだったよ」
「そ。じゃ、さっさと出てよ。鍵閉めるから」
無言で頷くと、かばんを拾い、部室から外へ出た。部屋の中は空気がよどんでいたのだろうか、外の空気がやけにおいしく感じる。だから、大きく息を吸い込んだ。
三咲はスカートのポケットから鍵を取り出し、しっかりと扉が閉まっているのを確認すると、鍵穴に差し込んだ。
「これでよし、と。帰ろ、天海くん」
再びポケットに鍵を入れ、三咲はずんずんと廊下を歩いて行く。しばらく進むと、急に立ち止まった。三咲が振り返り、スカートがふわりと跳ねる。
「何してんの？　さっさと帰るわよ」
そしてまた歩き出す。今日何度目かわからないため息をつきながらも、きちんとその背を追っていた。

「あー、晴ちゃん追試なんだ……。今後の活動に支障があるかもしれないわね。今度勉強会開きましょうか？」
隣で、ぶつぶつと呟く三咲の手にはダイエット菓子パンが握られていた。今日も両親はいないらしく、これが晩御飯らしい。
「作れ」
「やだ」
肩を並べて下校する相手を見て、思うことがある。黙っていればそこそこかわいい（少なくとも俺は思っている）三咲には、彼氏がいないのだろうか。なんとも下世話な思考だ。なにより、独り言の多い女の子は、誰でも嫌なはず。結論、いるわけがない。
「天海くん？　今失礼なこと考えたでしょ？」
三咲は、にっこりとした笑顔で俺の顔を見返した。視界に映った三咲に、角とか羽とかが生えているのはきっと気のせいだろう。
「ま、いいわ。それより、部室で一人、何してたの？」
「……別に」
角と羽を直し、三咲は再び正面を向いて歩く。別に、何かをしていたわけではない。ただ座っていただけだ。
そう言うと、少し間が空いたものの、三咲はそっけなく答えた。
「そか」
それ以外、何も聞いてこなかった。基本的に、俺は静かな場所や雰囲気が好きだ。だから、今もそのまま沈黙を守ろうとして――止めた。だって、三咲は口元をプルプルと震わせ、今にもしゃべりたいオーラを全開にしていたのだから。
そう、こいつは静かな雰囲気が苦手な奴だった。
「そういやさ、何でかばんをトイレに持ってったんだ？」
勢い余って、とは少し違うけど、何を言えばいいか迷った挙句、口から出たのは、本当にくだらないことだった。それでも、会話がないよりはいいだろうと、そのままその話題で押し通す。
「へっ？　あ、っと。ま、間違えちゃって！」

「間違うって、意味わからねぇ。やっぱ、かわってんな、お前」
なんだか、ものすごく慌てだした三咲を見て、少し笑ってしまった。そこまで恥ずかしいことでもないだろうに。
「笑うなー！」
軽口を叩きながらの下校は、中々楽しいもので、三咲の家への分かれ道で二人して立ち止まり、長々と話を続けていたくらいだった。
ふと横目に入った空を見て、思わず「あ」と間の抜けた声が滑り落ちた。
忘れていたわけではない。ただ、そういう機会があれば、と思っていた。ならば、今こそが、ではないか？　時間を見る。……そう、上りきれば、丁度いい頃合か？
「わりぃ、三咲。またな」
「え？　ちょ、ちょっと！」
三咲が止めているようだが、気にしない。と言うか、急がなければならない。
大丈夫、まだ時間はある。
「はぁ、て、言うか、何で、追いかけなきゃ、なんないのよぉ！」
そんな三咲の声が、先程より幾分と遠くから聞こえた気がする。
ついてきているらしい。とはいえ、こちとらガチの全力疾走。いくらなんでも、高校生ともなった男女ではスピード、スタミナ共にその差は歴然だ。簡単に、追いつかれるはずがない。
文句なら後で甘んじて聞く。だから、とりあえず今は止まれないのだ。
「間に合うか……」
ちらりと見た太陽は、さらに傾いていた。
坂道を駆け上がりながら思う。
三咲は何をそんなに俺に付いてくるのだろうかと。そりゃあ、話の途中だったとはいえ、今の俺は間違いなく奇行に走っている。普通、付いてくるなどとは思わない、思ってもあきらめるはずだろう。
「ない、わねぇ」

遠くから、そんな呟きが耳に届いた気がする。
でも、今の俺にはその意味を思考する暇も時間もなくて、ただただひたすらに、上を目指した。
しばらくの後。垂れた汗が、公園の土に染み込む。坂道は終焉を迎えた。
開けた視界に、街の風景が飛び込む。同時に、紅く染まった夕陽も。
「っ、はあっ、はぁぁぁっ！」
さすがに息が切れた。
両膝に手をついて、荒れた息を整えることに全力を尽くす。正面を見ればわかる。どうやら間に合ったらしい。
今まさに、沈み始めた太陽。
黄昏に染まる街は、少しずつその明るさを失っていく。
そう、俺が見たかったのはこの景色だ。
「綺麗……」
後ろから聞こえてきた声は三咲のものだ。
不思議な物で、意識は完全に景色に向いているはずなのに、三咲のつぶやきが耳に入る。でも、不快には思わない。

夕陽が完全に沈みきって、深く、目を瞑った。
……よし、大丈夫。
今の風景、思ったこと、全てが頭の中で再生されるほど刻みつけた。
ひと月ほど前、空の親父さんに言われていたことを思い出す。
俺と親父さんの考えにそれほどの差異が無いのなら、うん。間違いはないはずだ。
「……ねえ、天海くん」
「うおっ、いたのかよ」

不意に聞こえた声は三咲のもので、まさかまだ残っているとは思っていなかったのだ。
「いちゃ悪いっ？　っていうか、何？　なんかいきなり街見下ろして黙り込んじゃうし、それを三十分くらい見続けたこっちの身にもなってよね！」
「いや、つーか、俺にはなんで三咲が付いてきたのかが不思議なんだけど……っいて！　おい、なんで叩くんだよ！」
「うるさい！　ついていかなきゃいけないと思っただけよ！」
なんだそりゃ。
ポカポカと俺をたたいてくる三咲を見ながら、苦笑が漏れた。
そのことで、さらに三咲の熱が上がっていくが、そんなことは知ったこっちゃない。ただ、三咲といることが、とても楽しく感じられた。
それだけが、確かな真実だった。

4．立ち込める雲

到来する夏休み――の二週間前。
本来は休日であるはずの日曜日、時刻は真昼間。届いた材料を前にして、俺たちはふるってもふるってもまとわり付いて来る暑さの中にいた。
ここは『生徒会備品置き場』またの名を、『小体育館』。中山先輩と三咲の対決の翌日。再び目の下に隈を作って、工藤は原稿用紙を握り締めて現れた。さすがと言うべきか、非の打ち所のない内容に、しぶしぶ先輩は使用許可を下ろしてくれたのだ。そして、注文していた材料が届いた翌日、俺たち飛行研究部員はここを訪れた。
「おい」
「じゃあ、現場監督はあたしと工藤くん。空、晴ちゃん、あと天海くんは私たちの指示の元、動いてもらうわ。勝手なことは許さないから」
小体育館の端にて、長机の上に設計図を広げた三咲は、得意げな表情を浮かべた。耳が悪いのだろう。俺の声は事実無根となってしまったらしい。まぁ、しょうがない。そういうこともあるさ。海より広い心を持つ俺は、さも初めて言ったかのように、もう一度声をかけてやった。
「おい」
「……じゃあ、まずはリブを作るわ」
ちらりと、三咲は俺の様子をうかがった。ただ、それもほんの一瞬で、すぐに顔を逸らす。……あからさまに意図的なものを感じる。と言うより、
「わざとだろ。無視すんな」
「なによ？」
不機嫌です、と自己主張するは、三咲の顔。まさか、ここまで言いたいことを顔だけで表現するとは、三咲麻耶。末恐ろしい。

「さっきから言ってるだろ。この部屋、目茶苦茶暑いんだよ」
くだらない考えはおいといて、思考転換。そう、暑い。それはもう、ものすごく。この上なく、非常に、暑い。室内温度絶対やばいぞ、ここ。
「うるさいわね。これくらい我慢なさい！」
「できるか！　もう汗で制服がびちょびちょなんだ！」
さすがの三咲も、それ以上の反論はできないらしい。すっかりと黙ってしまう。というよりも、窓を全開にしてるのにこの暑さはなんだ？　陰謀か？
「しかたがない。ここの立地条件が悪すぎる」
空も、よほど暑いのか、普段下ろしている髪の毛を頭の上で結んでいる。そこから見えるうなじが、非常に色っぽく、少しの間目を奪われてしまった。
「ですよね。校舎と体育館に挟まれてるうえに、肝心の窓は開けてる方にはありませんから」
工藤は団扇で扇ぎながら、すでにダウンしているご様子。内村にいたっては壁にもたれかかったまま、意気消沈。
「空や工藤くんまで言うなら考えないこともないけど……。でも、どうしようもないのよ！」
確かに、手近なところにコンセントがあるわけでもないし、扇風機は使えない。できることといえば、
「三咲。今日はあきらめよう」
「何でそうなるのよ！　根性が足りないわ！」
元気に拳を振り上げ、あせを撒き散らす三咲を見て、問い正したくなる。というか、問いただす。
「お前は暑くないのか？」
「暑いと思うから暑いの。涼しいと思えば涼しくなることもあるかもしれないし、ないかもしれない」
「結局どっちだ」
「どっちでもいいの！　とにかく、作業開始！」

三咲は手を叩いた。同時に、パン、という無味簡素な音が、この空間に響き渡る。作業開始、と言われても……。
「何をするんだ？」
「はぁ？」
三咲の細められた目が、何バカなこと言ってんの？　と、その心情を物語っていた。
「さっきから言ってるでしょ？　リブを作るのよ」
「なんだよ、リブって」
「骨組みのことよ、ほ・ね・ぐ・み。意味わかる？」
要するに、家の柱みたいなもの。隣にいた工藤が、そっと耳打ちをしてくれた。なるほど、確かに、何事にも必要な要素だよな。
「作るのに必要な道具とかはこっちで用意したから。とにかく、暑さに負けず頑張りましょう！」
それじゃあ、と、三咲は再び両手を勢いよく合わせた。

基本的に俺と空と内村は、工藤の指示の元に作業を進めた。三咲は一人で十分らしく、一人で黙々と作業を進めている。
「工藤くん、ここは何センチだ？」
「えっと、そこはですね……」
空がプラスチック板と定規を持ちながら、工藤に問いかけている。内村は、なにやら必死で定規を合わせようとしているようだが、うまくいっていない。半分涙目になっているのが、実に内村らしい。そして、俺はというと。
「あちぃ……」
制服の首元を人差し指で引っ張りながら、そんなことばかり言っていた。少しはやろうかな、なんてことも思ってたが、暑いものは暑い。やる気など、こんな場所で起こるはずもない。
「天海先輩。あまりサボってばっかりだと、部長にどやされますよ

？」
「つっても、あちーもんはあちーんだよ」
「なら、せめて袖ぐらい捲ったらどうですか？　よくこんな場所でまで長袖でいられますね」
「人の勝手だ。カッターシャツは俺の美学だ。美学」
工藤から視線をずらし、横に見た内村に異変を感じた。
作業をしていたはずの内村は座り込み、はぁはぁ、と荒い呼吸を繰り返していた。すぐに近くによって、その肩を揺さぶる。
「大丈夫か、内村」
「っはぁ、大丈夫、ですっ」
大丈夫なのは、言葉だけだ。虚ろなその目は、焦点など合っていない。直感的にやばいと感じ、すぐに一人作業する三咲に向かって声を上げた。
「おい、三咲！」
「……」
返事をすることなく、三咲は黙々と手を動かす。そんな場合じゃねえっていうのに、俺の中で、怒りにたような感情の発起があった。
「おい！　聞けって！」
「何よっ？」
不機嫌オーラ爆発寸前。視線だけで、ウサギくらいなら殺せるだろう。それくらい、今の三咲は怒っている。って、そんな場合じゃねぇ！
「内村、なんかやべぇぞ！」
「え？」
三咲はあっけに取られたような声を出した。さっきまでの怒りは、もうどこそかへ飛んで行ったらしい。その場に立ち尽くす三咲とは違い、工藤と空は、小走りでよってきて、内村の傍でかがむ。それを見て、我に返った三咲も近くまで来る。
空が内村の唇に、そっと触れた。すぐに振り返り、工藤と目を合

わせてうなずく。空はそのまま、指を少し口に突っ込み、工藤はユーターンして、かばんをなにやら探っている。
「ねぇ、空！　晴ちゃんどうしたのっ？」
立ち上がり、俺たちと向かい合った空は、一息ついて、口を開く。
「……軽い脱水症状だ。口内はまだ乾いていないし、とりあえず水分補給。工藤くん！」
はい！　と後ろから声が聞こえ、脇をすり抜けるように工藤が現れた。手にはペットボトルを握っている。
「どうぞ！」
「ありがと」
すばやく受け取った空は、ふたを開いて、内村の口へ持っていく。同調するように、のどがごくごくと鳴っている。口から水が漏れてはいるが、何とか飲んでいるようだ。
「とりあえず、ここから出したほうがいい。工藤くん、そっち持って」
「はい！」
小体育館を出て行った三人を見送ると、三咲は緊張の糸が切れたかのように、その場にへたり込んだ。額には玉のような汗が溜まっている。俺は、目線を合わせるように、かがみこんだ。
「とりあえず、俺らも保健室行こうぜ」
ほっと一息をついたのは、俺だけだった。
三咲はため息を吐くこともなく、呆然としたままだ。震える口元に、手のひらを持っていき、体全体が揺れ始める。
「三咲？」
返答は無い。
おいと、三咲の肩を揺らそうと思った瞬間、両手をぶらんと下ろし、口元がかすかに動いた。
「……だめだなぁ、やっぱり」
三咲は天を仰いで、そんな言葉を漏らした。震えはいつの間にか止まっていた。

「駄目？」
「うん。もうだめだめ。なにやってんだろ、あたし」
へたり込んだまま、体操座りをするべく、足を抱え込んだ三咲。俺のアングルから、ちょうどスカートの中の白いものが見えているのだが、気にしないでおこう。
「根本的に、わがまま、なんだよね。人に迷惑かけてばっかり。こんな部長に、誰がついてくるんだってのよ」
初めて見た、三咲の落ち込む姿。それは、想像もしたことのなかった姿で、予想だにしないものだった。
あまりにも弱弱しく、可憐。はかない美しさとでも言うべきか、普段とは違う美を表現していた。同時に、今にも消えてしまいそうな感覚もある。
「何言ってんだよ。今までだって、散々自分勝手なことばっかしてきたじゃねえか」
「……」
「それでも、さ。ついてきてるぜ？　他の人とかはともかく、俺はな」
「天海くん……」
元気付けるためとか、そんなんじゃない。ただ、ありのままの真実。毎日の高校生活で、一番元気をもらえるのは、間違いなくこいつといる時だから。うっとうしいぐらいの紫外線も、今の俺にはちょうど良いから。こんなことで、居場所を壊したくなど無かった。他のなんでもない、俺が元気付けてもらいたいから、こうしてるんだ。
「そりゃ、ちょっとは自制してもらいたい時もある。でもな、今のままで、俺は良いと思う。なんつーか、それが三咲麻耶って言う奴なんだからさ」
顔をさらに下に向け、表情がうかがえない。それでも、もう大丈夫。俺は、百八十度体を反転させ、小体育館の入り口へ向かって、足を踏み出した。開けっ放しにしているドアに手をかけ、後ろを振

り向いた。
「じゃ、俺も行ってくる。やっぱ、心配だしさ」
体が、中よりは幾分涼しい外気に触れたとき、「待ちなさいよ！」と、怒鳴りつけるような声が、俺の耳に入ってきた。つい、口元をほころばせる。やれやれ、辛気臭くなるなんて、らしくねぇーつーの。
「私も行くわ」
「どうぞ、ご勝手に」

「すいません……私のためなんかに……」
簡素なベッドにその身を沈める内村は、ただでさえ小さな体を、さらに縮め、落ち込んだ風に佇んでいた。それは、作業の中断は自分のせいだからと思っているからだろう。もっと言うならば、三咲がこの上なく真剣な顔でいるのも関係するのだろうが。
「晴ちゃん」
「……はい」
控えめな声を上げた内村は、ゆっくりと視線を上げ、三咲と目を合わせた。
「ごめんね」
「え？」
「晴ちゃんのせいなんかじゃないわ。あの環境じゃ、遅かれ早かれ、誰かぶっ倒れてたわよ。ひ弱そうな男が二人もいることだし」
「ねえ？」と、三咲は俺と工藤に顔を向けた。頬をかきながら、工藤は苦笑い。まあ、ひ弱とは心外だが、頼りないってことではその通りだろうし、俺にもこれといった反論は無い。見ると、口元を押さえ、空が笑っている。
「……ひ弱。ふふ、蒼也にぴったりだ」
「笑うな」

そんな俺たちの談笑の最中、白衣をまとった女性が、カーテンを広げて中に入ってきた。
「結構回復したようだな。ま、今日のところはもう帰りな。ったく、ただでさえ保健室常連だってのに、休みの日まで来るこたぁ無いだろ」
「すいません、先生」
その女性は窓を開け、ポケットからタバコを取り出した。そのまま身を乗り出す格好で、黒い煙を体に入れ、外へと出した。
「久寿川先生、晴ちゃんもう平気なんですか？」
「早く帰れって言ってるだろ？　こんなとこにいるより、家で安静にしてろって意味。そのくらい汲み取りなさい」
保険医はタバコを口だけで咥え、左手で頭を掻き毟った。その仕草は、あきらかな苛立ちと、脱力感を示していた。そんな先生が気に食わないのか、三咲は軽く舌打ちをして、視線をベッドに戻した。
「それじゃ、今日の部活はここまでね。続きは……あたしが対策を練るまでお休み。誰か、晴ちゃんの家まで送ってほしいんだけど……」
頭を上げた三咲がみんなの顔を見回す。うーん、と唸りながら、最終的にその視線は俺にぶつかった。
「天海くんって、これから用事ある？　て言うか、そもそもこれからずっと部活だったわけだし、空いてるはずよね？」
にっこり、いや、ねっとりか。ねっとりとした三咲の笑顔が、かなり近距離まで近づいていた。
「ああ、別にいーよ。つーか、離れろ」
言っても離れようとしないので、俺は自ら動き、ベッドの近くまで寄った。
「せ、先輩！　私、一人でも平気ですよっ？」
「先生、付き添い、いりますよね？」
「そうだなぁ。帰り道突然道端でぶっ倒れ『助けて助けて』ともがくもそのまま次の日まで誰にも発見されずあまつさえ干からびた状

態になって新聞の一面に載るほどまでに放置されたくなかったらな」
「……お願いします、先輩」
「素直でよろしい」
保険医はニコリと笑う。彼女はそのまま二本目のタバコを取り出し、火をつけ始める。中々うまくいかないのか、かちっかちっ、と何度もライターを擦る。「ちっ！」と、大きく舌打ちをすると、タバコをすうのをあきらめたのか、そのまま白衣のポケットに突っ込んで腰を上げた。
「じゃ、さっさと帰りな。あいにく忙しいんでね」
先生は煙たそうに手を振った。三咲はその姿がやはりイラつくのか、貧乏ゆすりをしながらにらみつけていた。先生も、本当はいい人だって言うのに、なんでこんな憎まれる態度をとってしまうのだろうか。
「立てる？」
空が手を差し出したが、内村は軽くそれを断って、一人で立ち上がった。しかし、立ち上がると同時にバランスを崩し、倒れそうになる。それを、すぐ傍にいた工藤が優しく抱きとめた。
「大丈夫ですか？」
「う、うん、ありがとう、工藤くん」
工藤の傍からすぐに離れ、内村は一人で立ち上がった。
「失礼しました」
軽い会釈とその言葉を残し、三咲がいの一番に部屋を出る。続いて空、工藤、内村と出ていく。
「ああ、まあ、なんにせよラッキーだったのかもな。今日はさすがに眠れるだろう」
背後から聞こえた声に振り返る。
「ん、ああ。こっちの話だ」
間の抜けた顔を瞬時に変え、保険医は堅く笑った。

時々、内村と下校をすることがある。
そういう時は決まって、この曲がり角で別れる。俺は右に曲がって、坂を上がるが、内村はいつも海沿いを直進。だから止まらなかったのだが、内村は驚いたらしく、慌てた様子で声をあげた。
「こ、此処までいいですよ！」
「だーめ。つか、三咲からの厳命も受けているので」
何か言いたげな内村の頭に、軽く手を載せた。
「ま、気にすんなよ。何事もなけりゃそれでよし。何事かあったら、俺が居るんだからまだよし、だろ？」
「……はい」
顔が見えないくらい下を向いた内村が頷く。
「よし、じゃ、行こうぜ。こっちだってのはわかってるけど、正確な場所どころか、どの辺にあるのかも知らんし」
内村の指示通り進んでいると、さしかかったのは公園だった。
見覚えもあるし、何度か来た記憶もある。ただ、なにか特徴的な物があるわけでもなし、特別な思い出があるわけでもない。ただ、内村と公園、二つの要素が重なり合って、心に引っ掛かりを覚えた。言うなれば、出そうで出ないしゃっくりみたいなもの。
「……」
「どした？」
内村は、公園の全貌を視野に収め、立ち止まった。
俺にはなくとも、内村には何かあるらしいことがわかった。ただ、内村にとって毎日の帰り道でもあるはずなのだから、もしかしたら今日というこの日に何かあったのかもしれない。
「いえ、なんでもないんですけどね」
ちらりと俺の顔を盗み見て、内村は今日一番の笑顔を、今日一番つらそうな瞳で浮かべた。
「先輩とだと、やっぱりって」
よく意味が、わからなかった。

あそこです、と指差されたのはお世辞にも大きいとは言い難い一軒家だった。ただ、周りに視界を遮るようなものがほとんどなく、実際には距離的にまだ少しある。
だから、内村をおんぶしたのも、必然と言えば必然。
目の前で体調が悪いとわかっている女の子が、息を切らしていたら、誰でもそうするはずだ。
最初はかたくなに拒否していた内村だが、半ば無理やりな俺の態度に折れ、結局は身体を預けてくれた。
「っしょっと」
内村の家にたどり着いた時、背中からかすかな寝息が聞こえていた。
俺は起こさぬよう最善の注意を払いながら、インターホンを押す。はい、と小さく聞こえた後、中から出てきたのは男の子だった。背恰好からしてまだ小学生だろう。髪の色や顔立ちで、すぐに内村の弟なのだろうと察しが付いた。
「えっと」
「お届け者です、なんてね。……ああ、姉ちゃんの知り合いだ。心配するな」
俺の背中でぐっすりと眠る内村を見せると、しばし驚いた顔をした後、弟くんは口元をほころばせた。
「サンキュ。兄ちゃんさ、姉ちゃんのこれ？」
あろうことか、小指を突き立て、これ見よがしに見せてきた。
「残念でした」
そんなやり取りをしていると、背中に乗せた内村に動きが感じられた。
「あれ、ごめんなさい、寝ちゃったみたいで……」
「別にいいよ。それより、ついたぜ」

「あ、はい」
ゆっくりと地面に下ろしてやる。いつの間にか、弟くんはいなかった。中へ引っ込んだらしい。
「それじゃ、俺は帰るよ。水飲んで、ちゃんと寝ろよ？」
「あ、その、麦茶。飲んで、行きませんか？　ほ、ほら。先輩も、結構疲れたんじゃあ。私重いし……」
本音を言っても、全く重くは無かった。というか、ちゃんとメシ食ってるのか？　と疑いたくなるほどだった。
でも、のどが渇いていたのは事実で、それでも後輩の家、しかも女の子の家に上がるのに抵抗を覚えていた俺の背中を押したのは、やはり内村以外にはいなかった。

「はい、どうぞ」
「どうも」
通されたのは内村の部屋で、予想とは少し違った趣だった。掃除がされていないとかではなく、もっとぬいぐるみとかが雑多に置かれている、ファンシーな部屋をイメージしていたのだ。
それが、実際にはマンガやＣＤが棚に多く並べられ、机の横にはギターが置かれていた。音楽には疎いが、エレキなのだとはわかった。
無粋にもきょろきょろと部屋内を見ていたものだから、内村が心配そうに問いかけてきた。
「あの、変です、か？」
「全然。つか、まあ、ギターとか弾くんだなって。俺さ、あんま音楽関係疎いし、そういう友達もいないから新鮮でさ。触っていいか？」
「あ、はい。どうぞ」
手に取ってみると、案外重くて、内村はこれを肩から下げれるの

かな？　なんて変なところで疑問に思う俺がいた。ちらりと内村に視線を向けるも、やはりイメージには合わない。適当に指で弦に触れると、甲高い音がキィンと鳴った。
「あ、ピック、使った方がいいですよ」
ギターをよく見ると、手元のあたりに三角形の物体が挟まっているのが見えた。なるほど、これがピックかと、それを抜いて、上から弦を流してみる。
やはり、綺麗とは言いにくい音が流れる。
「アンプにつないでないですし、ちょっとわかりにくいですよね」
ほほ笑む内村の顔を見て、安心をおぼえる。倒れたばかりだったからか、すこし過敏になっているらしかった。
「じゃあさ、内村、なんか弾いてみてくれよ」
「ふえ、わ、私がですか？」
驚いている内村をよそに、ギターを強引に持たせ、少し後退して座り込んだ。
当初こそ、困り果てていた内村だったが、あきらめたのか、それとも覚悟を決めたのか。首からギターを下げ、きちんと持ち直した。
机の上にあったコードをギターに差し込み、少し大きめのスピーカーらしきものにつなぐ。
「じゃあ、弾きますね」
一息後、内村のピックが弦をはじいた。
エレキギターと聞いて、予想していたものよりずっと綺麗で、おとなしい旋律。
数秒で一転。今度は激しく、音が踊る。見た目、指はあまり動かしていない。音は伸びる。すっと、心に侵入する。
それからはメロディを大事に、激しくはいかず、音に余韻を持たせるような。
生で聞いた音楽に惹かれたのは、これが初めてだった。

弾き終わった後の内村に、個人的には盛大な、でもたった一人でしかない簡素な拍手を送る。うまかった。それ以外にはない。
「あ、ありがとうございます」
ぺこり、と頭を下げた内村には、先程までの真剣な感じは消えていた。
今でも、この目の前の少女が先ほどの演奏をした人物だとは信じられない。
「なんか、聞いたことない曲だったけど、内村作？」
そう聞くと、慌て、あたふたしながら、内村は否定した。
「ち、違いますよ！　私の好きなバンドのカバーですっ。す、少しはアレンジしてますけど……」
そう言ってギターを置いた内村は、ＣＤの置いてある本棚に向かい、一枚、差し出してきた。大きくカバーに描かれている文字は『パーソナルワールド』
その下には、大きな青い傘が描かれていた。
「ｓｔｉｃｈっていうバンドの、インディーズシングルです」
「へぇ。結構有名？」
「いえ、あまり。でも、私はすっごいすきなんです」
きらきらと効果音が出そうな瞳に、吸い込まれそうになる。
ああ、本当に好きなんだろうな。内村の態度からは、そう感じ取れた。
「……借りてもいいか？」
「え？　あ、は、はい」
なぜそんなことを思いついたのか。
おそらく、ただの偶然。興味が惹かれたのは事実だが、元来音楽とは無縁で、聞くことなんかテレビ番組ぐらいでしかない自分が、なのだから。
「サンキュ」

＊＊＊

あれから三週間がたった。
暑さはどうにもならなかったが、水分補給をきちんとすることで脱水症状を防いだ。とりあえず無理はせぬように、と三咲からも言われ、皆少しずつだが着実に進め、ついには部品のほとんどを完成させた。
「で、あとはその……ＳＤＶ、だっけか？　あれだけだろ？」
「なんかね、空のお父さんの知り合いが大学で物理を専攻していて、古くなったものをくれるんだって。今、空と工藤くんが取りに行ってるわ」
なるほど、だから二人は居いないのか。
ひとまずの作業終了で、今日は久しぶりに生物第二教室に集まっていた。
「じゃ、二人が来る前に。はい。くばって」
三咲に渡されたのは数枚の紙がホッチキスでとめられたもの。修学旅行のしおり、見たいな感じだ。
「夏休みの計画表よ。ほら、前に皆の予定聞いたでしょ？　それから、作業のできる日をまとめてみたの」
見れば、その日は何をする予定だとかまで、正確に書かれていた。
「よくもまあ、こんな面倒なことを」
悪態をつきつつも、さらっと上から見ていく。
二十八日から三十一日までは休みのようだ。
「ああ、その日は私の用事。家族で旅行に行くの」
「へえ、どこ行くんだ？」
「東京」

「お待たせ」
三咲の答えを聞いたその瞬間、部屋のドアが開き、二人が顔をのぞかせた。その手に持つ物こそがＳＤＶとやらなんだろう。見た目、完全に自転車のペダルだ。
「ま、聞いてた通りだな。なんか、競輪選手でもなきゃ、空飛びそうな感じはしねえけど」
「……そんなことないですよ」
工藤が続ける。
「前にも言いましたけど、このＳＤＶ機構は、従来のペダルでは霧散していくエネルギーのほぼすべてを力に還元できるわけですから、理論的には、空を飛ぶのに必要な力は得られるはずです。実際、参考にした大学の飛行機は飛んでいますし」
「ふーん……」
けど、少し実感がわいたのは事実だ。
おぼろげ過ぎるほど、曖昧だった今回の発端を思い返してみても、かすかな希望を持てると言うのは、とてもすごいことかもしれない。

その夜。
朝から敷きっぱなしだった蒲団を綺麗に整えて、その上に寝転んでいると、机の上に置いてあるＣＤの存在に気が付いた。
そういえば、自分から借りると言ったくせに、まだ聴いていなかった。いや、聴こうと思ったんだが、うちにはＣＤを聴く為の機材なかったのが、今まで延期せざるを得なかった理由だ。
とはいえ、全く無いわけではない。母さんが仕事で使っているパソコンを使えば、聴くことは可能だ。無論、パソコンに詳しいわけではないが、音楽を聴くくらいはわけない。
よっ、と身体を起こして、リビングへ。
台所で皿を洗っている母さんの背中に声をかけた。

「母さん。パソコン、借りていい？」
「んー、別にいいわよ。ちょっと待ってね」
母さんは一旦洗い物を中断し、手を拭いてこっちへ歩いてきた。
立てかけてあった黒いカバンから、少し型遅れっぽい大きめのノートパソコンを取り出して、机の上に置く。
「あんがと」
電源ボタンを押し、ｗｉｎｄｏｗｓのロゴが画面に表示された。
「あ、そういえば」
そこで、何かを思い出したかのように、母さんが言葉を発した。
「三咲麻耶って子、確か同級生よね？」
「そうだけど、なんで知ってんの？」
高校に進学してから、我が家に友達をあげた覚えは無い。三咲なんてもってのほかだ。
「いやね、前にうちに電話してきたことがあったのよ。蒼也と部活が同じだとかで」
高校入学当初、我が校が全員部活参加しなければならないことを、俺は母さんに言わなかった。そんな母さんが、毎日早々と帰宅する俺に、こんなことを言った。
「部活はいいの？」
なぜ母さんが部活の事を？
そのことを聞くと、同じ部活の人から、あまり部活動に参加していないと電話があったらしい。あの時はさほど気にならなかったが、その正体は、予想通りと言うか、三咲だったようだ。
「あーね。で、三咲がなんだって？」
マウスを動かしてみるが、遅れた動作で付いてくるポインタにイライラしつつ、母さんに聞く。一年以上前のことだ。何か、三咲と関連でもあったのだろう。
「うん。今日ね、結構忙しくて人手が足りないからって、いつもと違う場所にいたのよ」
母さんは看護師だ。海沿いにある大きな病院に勤めている。地方

の病院にしては、という程度のレベルの大きさだが。
実際、都会などの病院と比べると見劣りするかもしれないが、それでも、病院自体の規模は中々で、外科、内科だけでなく、多種多様な科が存在する。
母さんは主にホスピス病棟と言われる場所で働いているのだが、時々、患者が多いときなどに駆り出されることがあるらしい。
「そしたらね、患者さんで三咲麻耶って子が来たのよ。名前見て、あ、この子蒼也の友達のってピンときてね」
今日の三咲について思い出してみる。夏休みの予定表を配り、家族と旅行に行くと言い。別段、いつもと変わった様子は見受けられなかった。
「怪我でもしたの？」
「うーん、母さんが直接診察に立ち会ったわけじゃないし、色々バタバタしてたから。聞きそびれちゃった。怪我してる、って風でもなかったけどなぁ」
「ふーん……」
別に、病院に行くなんて珍しい事でも何でもない。
風邪をこじらせれば、どんな面倒くさがり屋も、行くことにはなるだろう。
……まあ、あの元気だけが取り柄のような奴が、風邪をひくなんて有り得ない。
そう、心中で否定しつつも、少し前。あの時見せた、三咲の弱気な側面が、その考えを逆に否定していて、僅かながらの不安が募る。
何もないはず。
母さんが台所に戻った後も、俺はしばらくぼうっとしていた。
内村に借りたＣＤは、今日も再生されなかった。

5．暗転、終焉

翌日、部室に集まったのは俺を含めた二年生、三人だけだった。
内村は夏季補習。工藤は連絡なし。
内村はまあ、わかるとして。
工藤が補習は有り得ないだろう。約束のぶっちなんて、俺たちの年代では珍しい事でもないのだが、工藤に限ってはないと確信できた。だからこそおかしいと思ったのだが、工藤だって子供ではない。心配するなとは言われないが、干渉しすぎるのも悪いだろう。
「……なあ」
「なにー」
けだるそうな声は、三咲のものだ。
暑い暑いなんて言いながら、空にべたーっとへばりついて、団扇で仰いでもらっているその姿は笑えるを通り越して引くレベルだった。
「なにってば」
「え？　あ、ああ。ちょっと気になった事があってさ」
「だからなにってばー？」
いつものような気迫を感じないのはこのけだるい暑さのせいだろう。
人と話すような態度かよ、なんて思いながら、少し感心している所もあった。
それは三咲の視線。
顔を向けているとは言い難いが、その目は間違いなく俺の瞳をとらえている。
話すときに、相手の目を見て話す。なんてことは、小学生の時に習うことだ。
けれど俺たちみたいな高校生には、中々できる事ではない。なんというかその、恥ずかしいのだ。

男と女を完全に区別できるこの年齢において、異性間で見つめ合うことは他の事を連想する。例え、意識していなくてもだ。
こいつとて、例外ではないはず。それでも、こうしてこの状況を保っていられるのは、区別が出来ているからだろう。いや、分別か。
ともかく、何が言いたいのかと言うと、ここで俺の顔がきっと赤面していると、自分でわかるくらい顔が熱くなっているのも、正常な反応で、いつもと変わらない目の前のこいつが異常だってことだ。
……たぶん。
「やっぱ、いいや」
「そ」
気になったと言っても、ほんの些細な、蚊に刺された程度のもの。かゆみはあるが、掻き始めるまで我慢なんていくらでもできる。
俺たちはそれから移動し、少数ながらも着実に作業を進めた。
一つ一つの部品を見て、これが飛行機になるのだと言う実感は無いけれど、少しずつ期待は膨らむ。なんだか、感慨深くもなるものだった。

帰る間際、校門から駆けていく三咲を見送っていると、背後から空に声をかけられた。
「……気になった事って？」
最初こそ、何を言っているのかわからなかったが、それが昼間の事だとわかり、「ああ」と首を縦に振った。
「いや、たいしたことじゃねえよ。なんか、母さんが病院で三咲の名前を見たとか言ってたからさ。ほんと、ちょっと。気になった程度だ」
空の顔が真剣なものだったから、俺は笑みを浮かべての対応を取ったのだが、どうやら空は機嫌が悪いとかではなかったらしい。
真剣だった眼差しはさらに細められ、けれど、その瞳の奥はどこ

か悲しみの色が映っている気がする。
「少し前に、やる気のない態度を麻耶に見せないでってやつ、覚えてる？」
「ああ、別にさぼってもいい、とか言ってたやつだろ？」
「そうそれ。……蒼也の懸念は、その件に関わること。理由をそのまま知ることに直結する」
その件とは、三咲と病院の事だとはわかった。
嫌な予感が、胸の中に広がる。俺は、開けてはならない箱をあけてしまったのではないだろうか？
「教える気は無いって、言われた覚えがあるんだがな」
「まだ早いと思っていた。自分で調べろと言ったのは、そうなったらいいな、程度の希望的観測」
空は身体を反転させた。
太陽からの逆光で、輪郭のみが鮮明に、とても奇麗に見えた。
「真実を教えるよ。そして、これからどうするかは、キミが考えるんだ」

到着したのは病院。母さんの勤務先だ。
自動ドアが開けた先は、今までいた世界とは全くの別物、心地の良い涼しさがあった。
「あら、蒼也に空ちゃん」
同僚の人と歩いていた母さんが俺たちに気付く。笑顔で寄ってきた。
「お久しぶりです」
空が深々とお辞儀すると、母さんは笑いながら「いやね」と答える。
「そんな仰々しくしなくたっていいわよ。昔はしょっちゅううちにもきてたじゃない」

昔から、この二人は仲が良い。正確には、母さんと『猫を被った』空が、だが。
基本的に、空の中には一定の距離感と言う物が存在し、それを越えた人、そうでない人には圧倒的に態度が異なる。
前者には素の狩野空、意地が悪く、それでも、絶対的な信頼が置ける人物になりうる。
後者に対しては、表面上こそ笑顔で受け答えるものの、その関係は薄い。
ただ、母さんとの関係においては少し、その法則に誤差が生じる。なんというか、猫を被ったしゃべり口や態度こそ、後者にたいするものなのだが、向ける視線や信頼の度合いなどは、俺たち部活メンバーと遜色が無いようにも思えるのだ。まあ、目上の人に対しての態度であるとも取れるのだが。
ともかく、二人は仲が良い。
会えば当然、話がはずむのも頷ける。
「天海さん。仕事中です」
咳払いをして、母さんの同僚の人が諌める。「あ、ごめんなさい」と言い、母さんは俺たちから離れていった。
曲がり角までいった母さんは、もう一度こちらに振り返ると、大きく手を振った。
「また今度、うちに遊びに来てねっ」
眩しいほどの笑顔。どうやら、思っていた以上に、母さんも空が気に入っていたらしい。
空が再び歩み始め、それに付いていく。道すがら、話したのはさっきのことだ。
「母さんと、えらい仲いいよなぁ」
「なんでだ？　楽しい人じゃないか」
他愛のない会話をしていた時、廊下の曲がり角で、不意にたち度持った空に胸を押された。何事かと思ったが、空は俺の胸を強く押さえつけ、口元に人差し指を当てた。黙れと言うことらしい。

「ここに、お父さんが世話になってる先生がいるんだ。ほら、うちの、結構歳だし、いろいろと悪いみたいで」
病棟と病棟の間に、ぽっかりと存在する中庭に、吹き抜ける風は冷たく、夏だというのに、一時の間だけ、背筋がぶるっ震え、伸びた。
なにも、気候が全てに関与しているわけではなかった。
一抹の不安が、背筋に雫となって落ち、拭えない。伝う度に、肩が上がる。
「本当に、偶然だった。あの日は偶々、お父さんが検査入院する日で。着替えを持って、此処に来たんだ」
「……おじさん、そんなに悪いのか？」
予想していなかった問だったのだろう。空は目を見開いたかと思うと、目蓋がすぐに落ち、苦笑と名付けられた一息を、ふっ、と吐き出した。
「なんちって。あのおじさんにかぎって、ねぇよな」空が切り返す前に、最初からわかっていた答えを口にした。
少しでも柔らかい空気にしたかった。穏やかな、そう、今までの日常に、戻ればいい。そうすればきっと、空の話したい事なんて、大した事じゃない。
「麻耶は病気なんだ」
病気。
ただの風邪に、その単語は用いられない。もし、その単語が会話の最中に現れたのだとしたら、それは――
「麻耶を蝕んでいる病の根は、深い。そして、根を張った大木は、そのツタをさらに広げていた」
風が吹く。
夏のはずなのに薄ら寒いその風は、少しずつ俺の胸を冷やしてい

く。いつの間にかびしょびしょになっていたシャツが、そう、感じさせているのかもしれない。
嘘だといって欲しい。ただ、それだけを思って。ほかの事なんて何も考えず。ただ、空の瞳を見つめた。
返答らしき挙動は無い。言葉も、もちろんない。
その時、空が俺から視線をずらした。つい、その視線を追って振り返る。
そこは玄関のロビーが窓越しに見えて、空の言葉が真実であると告げるように、三咲麻耶がソファに座っていた。
すべての答えがそこにあった。
解を得た俺は、ただ呆然と、立ち尽くした。隣に寄り添う空は、いつまでも、その口を開く事はない。

＊＊＊

その病気の、発症のメカニズムは明かされていない。けれど、多くは小さな子どもがかかる病気とされる。生活習慣に問題があるわけではなく、あくまで先天的なものって理論が主流らしい。
あの後、三咲の病気について調べた結果、資料や文献、ＨＰなどは腐るほど出てきた。俺だって、名前くらいなら聞いた事がある有名な病だ。まさか、同級生がなるだなんて、思ってもいなかったが。
色々と合併症も存在する、大変危険な病気だということは知っていた。命の危険だって、ないわけじゃない。
……ただ、そのことが、三咲の病気が、飛行機作りにどう繋がるのかわからなかった。空は言った。やる気のない態度を見せるなと。
ならばやはり、この二つの事象には何かつながりがあるのだ。何

か、深い繋がりが。
ばらばらに散らばったパズルのピースは、絵柄が描かれていないかのようで、まるで攻略の糸口すら見当たらない。
ただ、時だけが過ぎていく。夜は、なんて短いんだ。

七月二十六日。
三咲の真実を知った俺は、さらなる真実を知るため、ある決意を持って部活に来た。
直接、聞こうと思う。それがきっと、正しい判断。こそこそと隠れたまま調べて、そこで得た真実に信憑性なんてない。真正面から向き合って、それから考えればいい。俺は、どうすればいいのかを。
「あら、天海君早いじゃない」
まだ、部室には三咲一人しかいなかった。好都合だ。
足早に中へ入り、いつもの定例席へ腰を落ち着かせた。
「まだ皆来てないから、誰かきてよかった」
いつもより穏やかに見える三咲の表情。
決意を決めてきたはずだが、思いっきりが出ない。他愛のない会話の中、ここだっていうシーンはあるのに、勇気がない。
「にしても暑いわよねー。まったく、地球温暖化とか、ふざけんじゃないってのー」
でも、聞かなきゃいけない。だから、脈絡も何もなく、思い切って、三咲の会話を打ち切った。
「お前、病気なんだって？」
三咲は唖然とした顔を見せたが、それも一瞬の事。ポツリと「そっか」なんて呟いて、立ち上がった。
窓のそばに立った三咲は、身体をこちら側へ向け、俺の言葉を肯定するように首を縦に振った。
「知ってたんだ」

「ああ」
そんなに清々しくされると、こっちがどう対応していいのかわからなくなる。俺はただ、三咲の紡いだ言葉を聴いているだけだった。
「気付いたの、四月くらい。色々体調悪かったし、それで病院行こうって行ってみたら、これ。あはは、ちょっと笑えるわよね」
笑えるわけがない。そんな、だって。
「でもさ、本命の病気自体は深刻なレベルじゃないって。毎日の薬液注射で、日常生活に不具合はない」
そう言って、三咲は手ごろな大きさの白い箱を取り出した。ワンタッチで開かれたその箱の中に、一本の注射器が映る。
病院で注射をうつときなんかに、機材をまじまじと見ることは無い。けれど、こうやって眼前でじっくりと見る機会できると、色々と、薄ら寒いものを感じた。
「これ……」
「定期的にうってるの。ほら、あたしがトイレにって言ったときは、大概それ。……なんだか、現実味ないよねー。ま、あたしだってこうやって見てみると、まだまだ空想なんじゃないかって思っちゃう。……でもね、やっぱり慣れるなんてないし、針刺すと痛い。でね、その度にこれでもかって、思い知らされる。これは、現実なんだって」
箱から注射器を取り出した三咲は、自嘲気味に笑いながら、それを弄ぶ。
「……でね、さっきも言ったけど、これしてるかぎりは病気の進行はけっこー、大丈夫なんだって。ただ、ここ」
そういって、注射器をなおした三咲は右の人差し指で自分の目を指差した。三咲の病気について調べていた俺は、それが何を意味するのか、よくわかっていた。
「合併症の、網膜症。目の病気。……これだけは、結構進行がひどくって、最悪失明も覚悟をしたほうがいいって」
なぜ、そんな事をさらりと言ってのけるのか。

失明という単語は、今まで聞いてきたどれよりも重いものがある。光を失うという事は、まったく、これっぽっちも想像できない世界で。

けれど、閃いた希望はあった。今の時代だ。どんな病気だって、手術っていうものがある。もちろん、三咲を蝕む根本をなおす手術はなくとも、目の病気ならばと、淡い期待があった。

「……手術、あるんだよな？　たしか。それ、受けろよ」

「……もちろん。あたしだって、好き好んで目ぇ見えなくなんて、なりたくないわよ。……でもね、無理」

理由を聞くのは憚られた。俺に、三咲の、なにがわかるというのか。口を出すなんてこと、出来るわけがない。

三咲はそこでにっ、と微笑み、俺の方へ歩み寄ってきた。身体が思わず反応して、びくっと震えた。

「だから、もしかしたら最後になるかもしれない光ある世界で、あたしは空を近くで見たかった。父さんが自慢げに話してた、あの空を」

そこで振り返り、窓の外へ二人の視線がいく。

空は、あまりに綺麗だった。綺麗過ぎて、何もかも忘れてしまえそうだった。

「今まで、ありがと。あたしの我侭に付き合ってくれて。でも、もういい。皆にも言うわ。だって、フェアじゃないもの」

耐えず、笑顔を崩さなかった三咲。その顔は、今日の空に勝るとも劣らない、美しさを孕んでいた。

6．決意の夜

窓から差し込む朝日は、寝不足の眼には少々きついもので、思わず細めてしまう。体を起こすも、疲れが取れた感はまったくない。立ち上がるのが億劫になったのと、時計に示された時刻表示がまだ五時であったこと。その二つが重なってか、俺は再び身体を横たえた。

眠気はやってこない。確実に、疲れているのに。それでも、目を開くのが辛く、自然と瞼が落ちる。

瞼の裏に感じる朝日がまぶしい。ごろん、と寝返りを打って、身体を反対方向へ向けた。

昨日。

あの後三咲は早速、部室へやって来た全員に俺と同じ内容の話をした。自分が病気で、そしてその合併症から失明の危険があること。手術を、とある事情で受けられない事。

空は、眉を八の字に曲げ、苦しそうに顔をゆがめる。一転、頭を垂れた。諦め。そんな感情を、雰囲気がかもし出していた。

口元に手を持っていって、信じられないといった様子で三咲を凝視したのは内村。その瞳に、すぐに大粒の涙がたまっていくのを見て、三咲が数瞬、暗い顔をした。

工藤はただ、唖然とした顔で固まった。けれど、口を開け、放心しているのは確かなはずなのに、目だけは孤高の輝きを放つ。まるで、俺たちとは違う未来を見ているような気がして、思わず、目をそらした。

そんな中、俺は意識をどこか遠く、名も知れぬ場所へ放り、そこから部室を第三者的な立ち位置で見ていただけだった。本人の口から聞いた二度目の告白。けれど、やはり心にのっかかるショックはそれと同等のもの。ただ奥歯をかみ締めた。

俺たちの示した、それぞれ異なった反応に、三咲はニコリと、い

つもの笑顔を向けると――頭を下げた。直立不動で、淑女的で。そんな三咲を、俺はこれまで見た事がなかった。あるわけが、なかった。

「ごめんね、みんな。あたしの我侭に付き合わせて。でもやっぱ……違う、わよね。人って、それぞれに決められた時間がきちんとあって、それを無闇に奪ってしまうのは、とてもじゃないけど褒められたものじゃない。夏休み、もう残りわずかだけど……思いっきり楽しんで！　部活の事は、一切、気にしなくていいから。ね？」

誰一人として、その場から動こうとするものはいなかった。

嫌々やっていた奴なんて、この中にはいない。皆、三咲という太陽の下に集まった向日葵なのだ。ずっと、太陽の方を向いているのは生まれながらの運命で、なければ生きていいけない。「はい、解散」といわれて、「わかりました」と頷ける人……太陽から顔を背ける向日葵なんて、ありえない。

それでも誰も、否定の反応を示さなかったのは、一重に三咲の決意。打ち明けられた真実が、どれほど重みのあるものか、誰もが理解していたから。だから口をはさむ事が憚られた。してしまえば、今日の三咲の決心そのものをつぶしてしまう。少なくとも、俺は、そう思った。

もし日を置いて、考える時間さえあれば、絶対に首を横に振っていた。空が、工藤が、内村が、俺が。

三咲の傍が、俺たちの居場所であるのだから。

俺たち五人は、きっとそれぞれ『誰にもいえない秘密』を抱えて、生きている。真白学園美術部全員に当てはまる特徴。その事実事態には誰もが気付き、けれど決して暴こうと、知ろうと思わない。暗黙の了解、なんてものじゃない。ただ、それが一人分でも白日の下に晒されたら、俺たちは終わる。そういった事実が、きっとあったから。

それが今、現実のものとなっていた。予想通りの結末が、俺たちを締め付ける。

誰も動けない。地面に縫い付けられた八本の足は、何一つ糸を解く事が出来なかった。
「もう……」
三咲が声を漏らしたかと思えば、そのままパンパンと手を叩いた。乾いた音が、空気を振るわせる。
「はい！　解散解散！　閉めるわよ」
動かなかったはずの俺たちは、半ば無理やりに外へと追い出され、生物第二教室は鍵で閉ざされた。もう、その扉が開かれる事はないのではないだろうか。ちらりと、嫌な考えが、脳裏を掠めた。
終わったと、静かに、誰かが呟いた。

訪れた生物第二教室はやはり、しっかりと施錠されていた。つい習慣で開こうと手を伸ばし、その事に気がつく。意を決して訪れたはずなのに、な。思わず、二度三度と腕に力を込めてみるも変化はない。ぐっ、ぐっ、と硬い感触があるだけ。
窓越しに見える部室内。なれべられた机と、綺麗に掃除されているホワイトボード。それはあたかも、遠い過去を見ているようで。胸が、強く締め付けられた。
明らかに、この事態の一旦を担ったのは俺だったのだ。
「先、輩……？」
「内村……」
振り返ると、そこにいたのは美術部という砂漠に落とされた一つのオアシスだった存在。一年生部員の内村晴だった。
互いに、しばらく見詰め合っていたが、どちらかともなく噴出す。暗い雰囲気が、少しだけ払拭された。
「つい、な」
「はい。つい、です」
三咲の事を考えていた俺たちは、考えながら起きて、考えながら

歩いて、考えながら此処へきた。ただそれは、いつもの習慣だった。
その事実に二人で気がついたことに、なんとも笑えた。
聞けば、内村は先に小体育館に顔を出したらしい。結果は、芳しいものでなかったようだが。
「なんだか、嫌な感じです」
「ああ」
俺たち双方が見据える、同じ未来。
このまま三咲を中心に形作られていた美術部という城は瓦解し、取り返しの付かない事になるのではないかという、唯一の恐怖。
「私、いやです。このまま、終わるだなんて」
それは、飛行機の事か。美術部のことか。どちらもなのか。
どの選択しにせよ、確かに、その通りだった。
三咲は、中途半端すぎだ。とてもとても、半端な我侭を、我侭のお詫びに押し付けてきやがった。どうせなら派手に、爛漫としていればいいものを。
だって――
猪突猛進にひた走るあいつの背を、追いかける俺たちって構図が、一番美しいじゃないか。
「先輩……ひどい目ですよ」
「目……ああ」
言われて、そういえば今日は隈がひどかったなと思い出す。寝ていないのだから、当たり前だった。
「ちょっと眠れなくてさ。ま、気にすんな」
笑顔で答えたのだが、内村は焦ったように声を早くする。
「だ、だめですよ！　えとえと、……これ！」
内村は、制服の胸ポケットに手を突っ込んで、輪ゴムで留められた錠剤の束を取り出すと、折り目に沿って切り取り、一粒分を俺の掌に置いた。
「っ、ビタミン剤です。ね、眠れないときにいいですよ！」
必死で進めてくれるのは、暗に俺の事を心配してくれるからだと

わかり、やはり内村はいい奴だと思った。ビタミン剤を受け取り、その頭を一度、撫でてやった。やっぱ、妹みたいだ。
「あ……」
「さんきゅ。じゃ、今日のところはひとまず帰ろうか。……時間はないかもしれないけど、これからの事はこれから、考えればいい。な？」
「はいっ」
内村の笑顔に安堵する。昨日と今日で完全に変わってしまった世界だけれど、内村の笑顔は、以前と変わらないそれだ。まだ、変わっていないものもある。
だったら、きっと世界だって、元の形になる。いや、してみせる。
俺たちの世界を壊した俺なりの、責任。

＊＊＊

「ねえ、その絵って……」
「ああ、空の親父さんに前々から頼まれてたんだ。暮れ行く夕陽を絵にして欲しいって」
それは、飛行機造りに本格的に乗り出した前だったか、後だったか。どちらかわからないが、とにかくそのあたりの出来事だ。
「やっぱり、天海君上手……」
「そうだな。下手じゃねーとは思う」
きちんと夕陽のイメージを頭に叩きつけた直後ではあったが、完璧ではない。だから暗くなり、街灯の下へと移動した俺はこうして黙々と鉛筆を動かしているわけだが。これは、イメージを固めるための作業。ただ腕の動くままに、クロッキー帳に夕陽を描き連ねる。

「謙遜くらいしなさいっ」
「本当のことなので」
それからは、ただ作業を進める俺と、その後ろから絵を見つめる三咲がいて。そのままずっと――
いや、違う。
この時、三咲は確かに何かを口にしていた。確実に、俺はそれを聞いている！
なんだ、なんだ！
思い出せ！
――三咲は、なんと言っていた？

「まだ……見て、いたいよ……」

＊＊＊

目覚めた瞬間に時計を見やると、すでに時刻は夜八時を回っていた。家に帰り着いて、少し仮眠を取るつもりだったのが、だいぶ寝てしまっていたらしい。
そういえば、結局ビタミン剤は飲んでいない。今日の夜、本気で寝るときにでも服用させてもらおう。近くに落ちていた財布に、とりあえず放り込んでおいた。
それよりも、と起き上がった俺は、すぐにリビングへ顔を出した。とはいえ、二部屋しかないアパートだ。自然、食卓についてこちらもまた、眠りこけている母の姿が目に入った。

テーブルの上にあるのは、ラップされたハンバーグ。俺が寝てしまっていたから、母さんが作ったのか。
炊飯器の保温ランプが付いている。晩御飯を前にして、腹の虫が大きく合唱を開始した。ゆったりとした動作で茶碗を取り出して、ご飯をよそぐ。炊飯器の電源コードを抜いて、テーブルに着席した。
ラップを取り外して、両手を合わせる。
「いただきます」
夢の世界にいる母さんにそう言って、箸を伸ばした。
久しぶりに食べたおふくろの味は、少し味が薄かった。
食べながら、考えをめぐらせる。
眠った事で、少しだけ、頭がすっきりした。
やっぱり、このままじゃ駄目だ。俺は、俺たちは、ここで終わるわけには行かない。けれど、なら、どうする事が正解なのか。
その時、俺の頭に浮かんだのは、すべての始まり。作りかけの、あの飛行機だった。
「ごちそうさま」
米粒一つ残っていない食器を流しに運んで、母さんの肩に布団をかけた。
今日は帰らないかもしれないな。苦笑して、電灯を消す。玄関で靴を履いて、さあ出ようとしたとき、背後からもぞもぞと、音がした。
母さんが起きて、その弾みで布団が落ちたらしい。
「どこか行くの？」
少し、怯えの混じった声。寝起きであるからか。きっと、母さんは怖いんだ。俺がいなくなってしまうことを、理性を持った思考で考えていないのだろう。寝起きなんて、判断力が鈍るものだし、仕方がない。
俺は母さんと、もう離れるつもりは無い。
だから、精一杯の笑顔と声で、努めて明るく振舞った。
「大丈夫。明日には帰るよ。おやすみ、母さん」

「……うん」
その声を背に、今度こそ俺は家を出た。
夏場とはいえ、夜は冷える。昼間の制服のままでいたのは、失敗だったかもしれない。長袖であることに、ちょっぴり感謝した。
初めこそ早歩きだったが、次第に速度は上がり、いつの間にか走る。
時間が惜しい。鍵がないとか、そんなこと、着いてから考えればいい。今はただ、学校へ向かって、足を動かす。
赤いランプが、廊下の窓から煌々と光る校舎を視界に納めると、わき目も降らず、小体育館へ。
「開いてはいない、よな」
昼間、ここも施錠されている事は内村から確認済みだ。さて、どうするか。
考えていると、ふいに右肩に感じた感触に、背筋が凍った。急いで振り返れば、そこにいたのは黒髪青瞳の美女――狩野空だった。
「そ、空か」
「蒼也、驚愕してたな」
クスクスとささやかに笑う空は、夜の帳の中でも、やはり絵になる。いつか、人物画が書きたくなったらモデルをさせてもらおう。なったら、の話だが。
「先輩」
「あれ、内村？」
と、空の背後から顔を出したのは内村。やはり、考える事は皆、同じだったのか。
「晴ちゃんには昼間、少し手伝ってもらった」
何を、と聞くより早く、空はポケットから一束の鍵を取り出した。二つの鍵と、センスの悪いキャラのキーホルダー。
「それって」
「ああ、麻耶の部室と小体育館のスペア。二人で……なあ？」
「は、はい」

さらっと内村を鍵強奪に付き合わせた、ということか。大体の内容は想像つくから、聞かないでおいた。
「なら、早くあけようぜ」
「ああ。そうだな」
ガララ。鈍い音は、静寂を貫く夜の学校にはいささか大きなものだった。見回りの人が来ないかとひやひやしたが、そんな事を心配していては、何も出来やしない。思い切って奥へ進み、電気をつけた。
途端、明るくなる室内。暗闇では、作業なんて出来ない。
「工藤は……いないか」
工藤はこの場にいない。いるのは俺たち三人だけだ。
「内村、工藤に連絡、つくか？」
「はいっ、電話します」
この場に来ていない工藤まで巻き込むのは、いささか気がひけることだったが、いたし方あるまい。工藤か三咲。いなければ、『コイツ』を作るための設計図がないのと同義。三咲がいない今、工藤雅史はどうしても、必要なんだ。
「……あ、もしもし。はい。内村です。えっと、……」
少し俺と空から離れて、内村は工藤へ電話をかける。なんとなく、工藤なら来てくれるんじゃないかと思った。工藤は、三咲の事を心底尊敬していたように思える。だから、美術部の危機に、顔を出さないわけがない、と。
しばらくして、学校へ到着した工藤。事情は、内村がある程度話してくれていたらしい。
「本当に、やるんですか？」
「ああ。少なくとも、俺たちはそうする。コイツを完成させる。……コイツは、きっとまた俺たちをつないでくれる」
まだ骨組みだけの儚い存在。けれど一晩、二晩。もしかしたらそれ以上かもしれないけれど、いつかの夜があけた頃にはきっと――
「わかりました。微力ながら、お手伝いさせていただきます。ただ、

」
そこで一呼吸おいて、工藤は、しっかりと俺の瞳を見て言った。
「僕は、僕が正しいと思う道を進ませてもらいます」
それはきっと、飛行機の設計のことだろう。少しアレンジを加え、手早く、けれど最低限の昨日を実装できるよう設計しなおしてくれると。
この時、本気で俺はそういった言葉だと、受け取っていた。
「了解。よし！　じゃあ作業を始めよう！」
手を一度叩いて、大きめの声でそういった。
皆、強い眼差しを控えたまま、縦に大きく頷くのだった。

7．安寧と静寂と崩壊と

三咲は、二十八日から三十一日までの間、家族で旅行に行くと言っていた。それは、彼女からもらった「夏休みの予定表」にしっかりと書かれている事実だ。ま……つまりは、元々夏休み最後は作業をするつもりなんかじゃなかったんだ。だっていうのに、あの馬鹿。何が「残りを楽しんで」だ。

……あー、むかつく。都合のいい時間が存在したから、俺たちが同あっても干渉の出来ない、その間に、心の整理をつけようとしている。だから、思い切ったことがいえた。

とはいえ、三日。こちらにも、三日という時間が存在するのは事実。それが重要だった。俺たちは集まったその夜から精力的に活動を開始した。朝早くから夜は遅くまで。三日間、それ以外の形容詞で表せる日などないくらいに。

ただ……完成させることが出来るだなんて、まさかのまさか、思ってもいなかった。

主に作業は工藤以外の三人が、そして工藤は入れ替わり立ち代り、三人へ指示を飛ばして回る。ある意味、一番きついポジションを張った。指導者が優秀だったのか、因果もなにもわかったものではないけれど、今。たった今目の前にある真実がすべてだった。

湾曲して、左右に大きく伸びた一対の白い翼。その下に、人一人がやっと入れる程度の大きさの箱――所謂コックピットが存在し、その上で小さい割に大きな存在感を持つ二つのプロペラ。

なんというか、圧倒的だった。

俺たちはこんなものを作っていたのか。今になって、やっと本当の実感を得た。嫌々やっていたわけではないけれど、でも、この姿を見てしまえばこれまでの気鬱などなかったようなものだ。

これなら、こいつなら、連れて行ってくれると思った。三咲を。俺を。工藤を。内村を。空を。

あの果てしなく続く青の中へ。
「……今、何時だ？」
「えと、五時十二分、ですっ」
飛行機を見上げたまま呟くと、即座に内村が反応して答えてくれた。空と工藤は座り込み、半ばダウン寸前だというのに、以外にも内村はまだ元気でいた。あまり普段から、遅くまで起きているイメージなどないものだから、少しだけびっくりする。
「そか……なんか、……なんだろーな」
「はい……なんだろー、ですね」
二人して意味のわからない会話であることは間違いない。けれど、確かに伝わった気持ちがある。言葉では言い表せない、感動めいた何かを、俺たちは感じていたのだ。
「よしっ、……帰るか」
すぐさま三咲を呼ぼうとも思ったが、今日は三十一日。三咲は旅行から帰ってくる日ではあるが、何時ごろかは知らないし、明日はどうせ始業式だ。どちらにせよ会える。伝え、そして見せ。全部、それからだ。
まず、さし当たっての問題は――
「課題、ね……」
死に掛けていたはずの空が――実際に死にかけているが――声を投げつけたきた。正解。大正解。二重丸、百点満点だ。
俺は、まだ、夏休みの課題が、終わっていない。
「蒼也は最後に溜め込んで、一気にやるタイプだったもの。それくらいわかるわ。……ま、それでも確実に終わらせるのが蒼也が蒼也たる由縁なんだけど」
そこまでいって、空は瞼を落とした。あ、ありゃ寝るな。
「空、とりあえず帰るぞ」
その腕を取って、半ば強引に立たせる。ついでに工藤も立ち上がらせた。
「じゃ、解散ってことで。明日また、三咲をつれてここで。……あ

いつはさ、もしかしたら勝手に造ったことを怒るかもしれない。自分も立ち会いたかったとか、そもそも私なんかのためにとか。でもさ、俺たちは皆、あいつの笑顔がまた見たい。ただ、それだけ。明日笑わなくても、明後日でも、明々後日でも。いつか必ず……いつもの美術部に戻そう」

我ながら、臭い台詞を吐いたものだ。照れから、後ろ頭を知らずに掻いていた。慌てて止めるその姿に、三人が一様に笑った。

「ああっ、とりあえず解散だ！　鍵、閉め忘れないでくれ、じゃな」

そういい残して、俺は足早に小体育館を出た。

照りつける太陽が、いつもより緩い。きっと朝早くだから。それもあるだろう。けれど確実に、それは夏の終わりを告げるものであって。肌は、すでに感じ始めてもいた。

＊＊＊

「おはよう！」

翌日、それは教室へ、まさに入ろうとした時だった。

徹夜で終わった宿題は鞄の中で眠ったまま。俺自身も、深い眠りにつきたい感情を押さえ振り返る。

三咲麻耶は満面の笑みで俺の肩を叩いていた。一瞬安堵しかけた感情が疼く。けれどよくよくその瞳をみてみれば……わかる。以前の三咲らしい、キラキラとしたモノはなかった。あるのは取り繕っただけの、作り物の宝石。

でもそれも……今日で終わりだ。俺たちが皆、三咲の我侭にただ付き合っていただけじゃない。俺たちだって、本気でいた。その事さえ伝わればいい。伝わればきっと、三咲も笑ってくれる。きっと、

きっとだ。
「ああ、おはよう」
っと、見れば廊下の先には空がいた。隣に内村と工藤もだ。どうやら、俺の事を待っていたらしい。やれやれ、息つく暇もないらしい。ま、楽しみだった事が前倒しになったと考えればいい。
「？　天海君、どうしたの？」
「いや……」
教室に首をつっこんで時計を見ると、まだまだ、始業式まで時間はあった。丁度いい。
「三咲、ちょっと時間あるか？」
まだまだ、問題はきっと山積みで。けれど、それもこれも、初めの一歩を踏み出さなければ解決できない。
俺は不思議そうな顔をする三咲の手を引いて、小体育館へむかった。

『それ』を視界に納めた瞬間の三咲の顔は、何とも言いづらく、けれども確かに喜びの感情を孕んだものだった。
「これ……」
「なんつーかさ、ほらあれだ。俺たちは、その、嫌々手伝ってたわけじゃねーっつーか。ええい！」
言葉に詰まった俺は、思いっきり三咲の肩を掴んでこちらを向かせた。ただ、これから何をしたいのかを伝えたかった。
「えっ、え？」
突然の事に驚いたのか、頬が赤く染まった三咲。けれど関係ない。こうやって、顔と顔を突き合わせることで、やっと伝えられる想いはある。
「飛ぼう！　これでさ、空を飛ぼう！」
三咲の顔は見る間に崩れていって、けれど決して涙を流さないと

決めているのかのように口をつぐんで、そんな必死な表情がなぜか笑えて、思わず噴出してしまう。
「何、笑ってんのよ」
「いやすまん、つい」
「ついって何よ、ついって」
俺たちが軽口を叩き合っているのをただ見ているだけだった空が、携帯を取り出して俺に見せた。
「色々あるだろうけど、もう時間。ほら、早く体育館に」
始業式まであと少しだった。俺は慌てて、この場を離れる事を提案した。
皆頷き、けれど三咲は小体育館を出る本の少し手前で振りかえり、飛行機を仰ぎ見た。
何を考えているのかはわからない。けれど、ふとした核心はあった。これで万事とは言わずとも、うまくいく。三咲の病気とか、目のこととか、まだまだ色々ある。それこそ、俺たちには解決できないものばかりだ。だけど、なら俺にできる事だけでも。
「三咲、いこうぜ」
「うん……ありがとう」
最後に呟かれた言葉は、聞こえなかった事にしよう。指摘したら、きっと三咲は怒って追い回してくるだろうから。あいにく、今日は走り回る元気はないんだ。
皆で外へ。先程よりも熱い気温に、少し気分がめいる。空が施錠しようとしたところで、大きめの声が耳に入った。
「すいません、忘れ物しました」
それは工藤のものだった。忘れ物って、何か置くような暇とか、なかったと思うが。
なんて思ったものの、すぐに昨日からのかと思い当たった。
「行ってこいよ」
「いえ、時間もありませんし、先輩方は先に体育館に行ってください。あ、狩野先輩、鍵借りてもよろしいですか？」

「もちろん」
空は鍵束を工藤へわたした。隣で三咲が「無くしたと思ってたら！　焦ったんだから！」なんてほざいていたが、この際無視だ。わめく三咲を引きずり、工藤を残して体育館へ向かった。角を曲がる間際に振り返れば、もう工藤は小体育館の中へ消えていた。

＊＊＊

始業式が終わって、今日は大掃除で下校。俺はといえば、クラスで出たごみをゴミ捨て場へ運んでいた。
と、そこで三咲とバッティング。どうやら、三咲も同じらしい。互いにパンパンに膨れたゴミ袋を、可燃物とかかれた囲いの中へ放り込んだ。
「雑用おつかれさん」
「あんたもでしょっ」
と、三咲は急にしおらしくなると、頭を垂れてしまう。そして、上目遣いで俺の事を捕らえて、もじもじとし始めた。なんというか、正直な話。
「きしょいぞ」
「ひ、ひど！　女の子にそんな単語使うなんて！」
顔を真っ赤にして怒り狂う三咲だったが、うん。これが三咲麻耶だ。実に彼女らしい。実のところ、対して怒っていないのもわかるし、こんな風に軽口を叩き合えるだけで、今は満足だった。
きっとあのままでいても、見た目上の関係性なんて何一つ変わらなかった。けれど、それは無数に枝分かれする未来の中でも、最悪の結末に繋がってしまう。そんな予感があった。

ま……今はもう、そんな心配ないんだがな。たぶん大丈夫だろうって、なんとなく思う。
「で？　なんか用があったんじゃねーの？」
三咲が落ち着いたのを見計らって、歩きながら、そんな事を口にした。三咲は「ああ」と口にして、こちらを正面にして立ち止まった。俺も習って、互いに向かい合う形で止まる。
「ありがとう。それだけ言いたかったから」
「……よせよ。俺はただ、怖かっただけだから」
「怖かった？」
ああ、と答えて、何が怖かったのかを考えた。何せ、怖かったという感情は事実だったが、何がどう、１Ｈ５Ｗははっきりしていなかったから。いや。はっきりはしているんだけど、言葉に出来ないというか……難しい。
「……美術部が、なくなっちまうんじゃねーかって」
「ぷっ、何言ってるのよ」
「いや、笑い話じゃなくて、ほんとに。なくなるってのは、現実的な状態とかじゃなくて、本当の意味でっつーか……そんな感じ。俺が動いて何かが変わると思ったわけじゃねーけど、でも、何かせずに入られなかった。だってさ」
そこで気恥ずかしさを覚えた俺は駆け出した。三咲はあっけに取られたようで、しばらく追っ手はこなかった。角を曲がる直前に振り返って、ニコリと笑う。
「なんだかんだ、美術部けっこーすきだからな」
つまりは、ただそれだけのことだった。

＊＊＊

長かった掃除が終わって、廊下で集まった俺、空、そして三咲の三人は小体育館へ向かった。いつ飛ぶのとか、そういうのはまだまだ考えていないけれど、三咲が見たいとごねたのだ。まあ、俺と空も見たくないわけ無い。自分たちが作ったその姿はやはり感慨深いものがこみ上げてくるしな。

「そういえば、あれ、ちゃんと外に出せるの？」

「抜かりは無い。ってか、設計図見たろ？　まだ本格的な接合はしてないから、主要なパーツごとに分解可能だ」

小体育館へ向かうにはまず、下駄箱で下穿きに履き替えなければならない。ただ、小体育館の中ではスリッパを履かねばならないため、上履きを持っての移動となる。これが中々に面倒くさい。帰る間際に、上履きを下駄箱に戻しにこなければならないのだから。

ただ、今日はその上履きを持つ手がいつもよりも軽く感じた。なんとなくだけど、気分の高揚を感じる。

仰ぎ見た大空。すぐに、そこまでいける。そんな事を考えた自分を嘲笑した。

「……晴、ちゃん？」

三咲がポツリと漏らした。見れば、開け放された小体育館の入り口前で、内村が固まっていた。視線は小体育館の中へ注がれたまま、それる事がない。不審に思った俺たちは、駆け足で傍まで寄った。

「晴ちゃん！　どうした、の……」

いの一番にたどり着いた三咲までも、内村と同じ状態に陥った。どういう事なのか。見れば、空までも硬直している。

三人の視線の先……小体育館の中へ目をやった。

そこにあったのはただの――残骸。

どんな事変が起こって、こうなったといえるのか。完全に作為的なモノを感じるその姿。

世界は自分たちに甘くないとか、辛い事ばかりとか、どんな言葉で繕えば俺たちは納得できる？

ただそこにあった絶望の一言に、全身から力が抜けた。持っていたスリッパが落ちる。音を立てて、地面に転がる。

冷却していく思考は、次へ、熱く煮えたぎる怒りへの伏線だったのか。

ぶらんと虚空を舞っていた右腕を、ぎゅっと握り締める。

掌に食い込んだ爪。痛いけど、心の痛みは、きっとそれ以上だった。

俺たちの翼は、ただの一度も飛ぶことなく、墜落をしていたのだから。

8．背中に乗せて

落ち着こう。

そう、提唱したのは俺だった。まだなにもかもがわからなかったから。ただ、確実に目の前の惨状だけは理解できた。だからこそ、心を落ち着かせて、平静を保つ事が重要だって思った。我ながら、良くそんな言葉を口に出来たものだ。

とはいえ、不要な言葉だったかもしれない。皆、何をすればいいのかわからず、ただ立ち尽くすだけだったから。

どうして？

なぜ？

それらの疑問は、しかし解決される事なくねっとりと俺たちに絡みついて離れない。ただ、眼前で原型をとどめる事すらしていない翼。鮮明に色濃く網膜に焼きつくその姿に、くしくも心を奪われていた。

魅了されたわけが無い。ただ怒りがこみ上げてきて、それ以上に悲しくて、哀しくて。

これは全て夢で、一度目を瞑って、もう一度開けば元通り、そこにあるのではないかと本気で考えた。……結果、芳しいものは得られなかったが。

「……帰ろう？」

不意に聞こえたその声は、もう聞きなれてしまった色のはずなのに、どこか明るさが見当たらない。それはまさに、昨日までの――先行きの見えない偽装された彼女の声だった。

三咲は瞳をずっと正面に向けたまま。隣にいた俺に対しての言葉では、なかったのかもしれない。この場の誰でもなく、あえていうなら自分自身に言い聞かせるようなそれに、こみ上げてくるふつふつとした赤黒いものを、胸の内で感じた。

「そう……だな」

ただ肯定する。
考えが、あった。しかしその考えは、決して三咲の前では口に出来ない。
それは光明というよりも、ただの直感で。もしかしたらそうかもしれない、なんて、何も現状は変わらないけれど至る真実。そしてその事実が、たどり着いた結論が正しいものだったなら――
ちらりと視線を横へ滑らせた。
幸か不幸か。
工藤の瞳からは、何の感情も伺えなかった。

＊＊＊

「はい。先輩が言ったとおりです」
言葉よりも先に出かけた手を、理性が必死に抑え付けた。結果、体だけ前のめりになって、端から見ればなんとも不恰好な姿だろうか。
小体育館を施錠し、解散した後すぐに、俺は工藤を呼びつけた。勿論、三咲に悟られぬようにと考えたが、三咲は心此処にあらずといった様子で、いつもの注意力は皆無だったので、わずかばかり拍子抜けした。
けれど……いや、だからこそ。
俺は確かめなければならない。
落ち着いて考えれば、なんて事のないもの。
一番最後に小体育館を訪れたのは、施錠した人物は、目の前にいる工藤雅史以外の誰でもないのだ。
「肯定、でいいんだよな？」

「はい」
一切の迷いも無く言ってのけた工藤を見ていると、怒りよりもなぜ？　という感想が芽生えた。此処まで自信満々に答えた工藤は、悪い奴では決して無い。何かしらの理由があったのだろうと、やっとのこと思考は追いついた。
「なんでか、聞いても？」
「飛ばないから」
「は？」
間の抜けた声は、自分のもの。
工藤はただ言う。あの飛行機は『どうせ飛ばなかった』と。
構造上の問題。むしろ、元々、あの設計図どおり作ったところで、飛行距離などしれたもの。大空を飛ぶだなんて表現がおよそ似合わない不恰好なフライしかできない。
それを聞いて、やはりこみ上げてきたのは熱い、怒りの色だった。
右の手の甲に鈍痛。理性はもう、俺を止めなかった。
「っ」
「っ、だから……壊したって？」
例えフライトに失敗したとして、何だって言うんだ。三咲はおろか、確かに皆哀しみに襲われるかもしれない。でも、それ以上に喜びだってまた、あったはずだ。
一センチでも一メートルでも、どんな短い距離でも飛べばいい。それだけで、俺たちは笑い合えた。あの、鮮烈に輝いていた日々のように――
「本当にそう思いますか？」
「……」
「部長は、殆ど作成に着手していない。そんな部長が、たった少しの飛行で喜べるわけがない。そもそも、自分たちで作って、だから、飛ぶのが嬉しい。そうじゃないんですか？　部長をまじえないで造った時点で、どうせあの人は喜ばなかった」
反論はない。

びっくりするぐらいに、正論。
俺が三咲の立場だったとして、確かに嬉しさなんて、喜びなんてなかっただろう。
でも、だからって、どうして。
「どうせ落ちるのなら、僕は落下距離を少しでも短くしてあげたかった。ただ、部長の為に、」
「あれが、三咲の為かよ……。あんな三咲の顔が、見たかったのかよ」
「……あれよりもひどい部長を、見たかもしれません」
「可能性、だろ」
お互いに強く出る事がない。それは、どちらも正論でありながら不確かで曖昧な可能性だったから。
俺たちは互いに、三咲の笑顔を望んで、辛い思いを出来るだけさせたくなかった。同じベクトルのはずだった事象は、ただ、思いの大きさだけが同じの、まったくの逆方向になってしまっていたのだ。
「もう、いいんですか？」
背を向けた俺に、以外とばかりに工藤はそう言った。
言い訳が無い。でも、此処で怒りを工藤にぶつけたところで、何も変わりはしない。
工藤が壊したぞ、と三咲に教えてどうなる。尚更、あいつを悲しませる結果にしかならない。
「いいんだよ。悪かったな、殴って」
返事は聞かなかった。
足早に、俺は帰路に、
「しょうがなかったっ」
その声が、俺を呼び止めた。
「あの人は、あの人がっ、僕にとってこの世で一番大事な存在でっ。僕だってっ、あんな部長見たくなかった！　でも、正しいって、思ったんです！　ただ、ただ、僕はずっとあの人の笑顔が見たかった！」

工藤が三咲に抱いている想い。いくら鈍感な俺でも、気付いてしかるべきだった。
俺は何も言えない。慰める事も、諌める事も、出来やしない。
嗚咽交じりの工藤の声を背に、ただ逃げた。歩む速さは、秒針と共にその速度を速め、気付けば工藤の声は、すでに遥か遠くへ消えていた。

＊＊＊

どちらが正しいとか、そんなのはないって思う。
工藤がいう事も一理あり、俺もまたしかり。結局のところ思うところは、到達地点は一つなのだから。
「ん……」
天井の染みが目に付いた。いつ以来か、天井の染みの数を数えなくなったのは。ここに引っ越してきて一年以上。もう、夜に眠れないなんてことはなかった。
ふと、身体を伸ばした拍子で手に触れた固い感触。机の上にあったそれを手にとって、眼前へ持ってくると、いつかしら、内村に借りたＣＤだった。そういえばまだ、聞いていない。
やる事もないし、考える事そのものが億劫だった。何かに没頭する事は逃げかもしれないけれど、音楽でも聴きたくなったのはそれで、心を別のことへシフトチェンジしたいからだった。
とはいえ、パソコンは母さんの仕事用のもので、母さんが仕事に行っている今はこの家で、ＣＤを再生する手段はない。その事に気が着いた俺は、けれども何かすることは無いかと探した。そこで、手の中にいたままであったＣＤに目が移る。おもむろに開いて、歌

詞カードを広げた。
一曲目、表題曲でもある『パーソナルワールド』は、いかにもロックバンドって感じのもので、意味がわからなくは無いけれど、「ふーん」って感想で終わる程度の、何の感慨も湧かないものだった。もっとも、普段は音楽の歌詞をそんな風に見ることなんてないのだが、やはり、心のこのもやもやを何かで上書きしたかったのだろう。さらっと読み流した俺は、右へ視線をスライドさせた。
二曲目、『アンブレラ』

もし　雨が降ったなら　僕を広げてくれればいい　僕はただ
君の傘になりたい

一曲目にあるような、文章的に巧な表現とかは一切無くて、言ってしまえばすごく不恰好な詩。作詞の項目を見てみると、一曲目に詩を書いている人ではなかった。バンドメンバーですらないらしい。
「如月三月」
その名前に心当たりなんて無かった。ただ、なんとなく、口にしただけだ。
「アンブレラ、か」
愚直に相手の事を想ったと伝わってくる。俺ですら書けるのではないかと思える単調なものなのに、どうしてか読み返してしまう。
手を下ろし、目を瞑って、浮かんだのは三咲の顔だった。
ああ……そうか。
なんてこと、無いことだったんだ。
きっと今の状態の俺なら、他のどんなラブソングでも同じところへ至っていたのかもしれない。
ここ最近、色々あった。
三咲の笑顔が見られなくなるかもしれない。ただそれだけの事が、俺を動かした。
結果、三咲の笑顔は、完全になくなってしまったかもしれない。

……あの絶望を孕んだ表情を見てから、うまく三咲の笑顔が思い出せない。それほどまでに、さっきの三咲の顔は強烈で鮮烈で、耐え難いものだった。
立ち上がって、外へ急いだ。どうするべきなのか、どうしたらいいのか、俺にはわからない。でもとにかく、取り戻さなければならない。そう思った。
だって俺は、三咲の事がすきなんだって、気付いたのだから。
あの笑顔が好きだから、だから俺は、美術部に顔を出していたんだ。

＊＊＊

部屋が暗い。
窓を閉め切って、電気もつけていないから、当たり前なのだけど。
春先、急な体調不良を感じたあたしは、お母さんとすぐに病院へ行って、そして診断された。
兆候はあった。ふと、あるはずの信号が見えていなかったり、飛んできたボールに反応できなかったり。
確実に、視力が落ち始めていた。
その事も先生に話すと、すぐに網膜症だと言われた。進行が進めば、失明だってあると。
インスリン注射による病気の進行を抑える治療と一緒に、目の治療も始めることになった。
だけど……どうも運命とやらは、やすやすとあたしに安穏をくれるなんて事、してはくれないらしかった。
「もう、段階的には治療できるギリギリのラインです。手術をしな

ければ、失明は殆ど、確実かと」
担当に付いた眼科医は、苦渋を舐めた表情をしていた。彼は手術に踏み切る事が危険だという。
「麻耶さんの場合……とても、難しいかと。進行の具合がなにせ悪い。レーザー凝固はもはや手遅れですし……となれば硝子体手術、という結論ですが……一般的に、二十歳未満の患者さんには危険なんですよ、この手術は」
あたしにはよくわからないことばっかりで、うまく説明はできない。簡単に言えば、二十歳未満は手術に失敗すると即失明と、大きな危険が付きまとうのだという。
「今は、内服の治療で進行を抑えましょう」
結局、その妥協案ですべてが落ち着いた。
どうせ、進行が進めば失明は免れない。ならば、踏み切るのも一つの手だとは思う。
でも……怖かった。普段張っている虚勢なんか、役に立たない。怖くて怖くて、何も無いとき、一人で身体を震わせた。
失明。
その単語は、いつもあたしに付きまとった。
夢だなんて大それたものじゃないけど、あたしにはどうしても、見たい景色があったのだ。
今はもういないお父さんがいつも口にしていた言葉が思い出される。
『空はすごいぞ』
お父さんは、小さな飛行機のパイロットだった。観光用の、本当に小さなもの。でも、それでもお父さんは自信満々にあたしに言って聞かせた。
『空はすごいぞ』
もういないお父さんの影を、あたしは――。
……なんて、こんなものはいいわけだ。色々と言い訳を見つけて、あたしは手術から逃げた。進行していっているのがわかっていたの

に、ただ怖くて逃げた。
操縦室から青空を見たいと思っていたのは事実だけど、絶対ではない。
失敗の危険が高く、失敗はそのまま、失明に繋がる。
あたしには、決断が出来なかった。どうせなら、誰かに決めて欲しかった。なのにお母さんは、あたしの思う方にって、そんなの、あんまりだ。
「……最低だよ、あたし」
あたしたちの飛行機は、それはもう、完膚なきまでに破壊されていた。修復は不可能だろう。やるにしても、また初めからだ。
その光景を見て、あたしは、喜んでしまった。空を飛んでしまえば言い訳がなくなってしまう。あたしを守っていた、唯一つの言い訳が。
「最低だ」
抱えた膝に額を埋めた。
と、そんなときだった。携帯が、けたたましく音を立てた。着信先は、狩野空。
きっと、今日の事であたしを元気付けようとしてくれているんだろう。空はそういう子だ。最近、あたしの病気を知ってからは、何かと奔走してくれていることも、重々承知の事だった。だから彼女は、部活に顔を出す事が少なくなった。
そんな空の頑張る姿を知って、あたしはいつも胸が張り裂けそうなほど、自分自身が情けなくなった。
怖いからと逃げ続けている自分には、彼女はまぶしすぎた。
「……でないと」
無視をするなんて出来ない。したくない。
でも、通話ボタンに触れた親指が震える。あと少しが踏み込めない。
思い切って、ぎゅっと目を瞑ってボタンを押す。一秒ぐらいそのままでいて、その後携帯を耳に押し当てた。

「……はい」
『あー、三咲か？』
それは予想外の声だった。
天海蒼也。美術部の副部長。
あたしが彼に抱いていた想いは、春先の一件で彼方へと行ってしまった。忘れてしまったわけでも、消えてしまったわけでもないけど、……そんな事を考える心の余裕が、なくなってしまっただけ。
そんな彼が、あたしに？
……なんだかんだ優しい彼の事だ。空と同じく、あたしを元気付けようとしているのだろう。
そのはずだった。
『公園。ああ、一回絵ぇ描きに行ったあそこな。今すぐ、集合』
それっきり。通話は切れてしまった。
わけがわからない。
でも、行かなければならないとも思った。
あたしは、いつも元気でいなければならない。きっとばれているだろう虚構の笑顔でも、ずっと、顔に貼り付けていなければならない。
すぐにあたしは家を出た。
なにがあるんだろうなんて、期待すらないままに。

「これ……」
公園は、街の全容を見渡せる標高にあった。
そこで待っていた天海君の傍には、見慣れない乗り物があった。
あまり、街では見ない、自転車という。
「まー、黒歴史の一つ、かな。でも、必要だと思って」
天海君がそう言って、ハンドルに触れた。見れば、金属部分の殆どは錆びていて、年季を感じさせる趣がそこかしこにあった。

しかし、その造詣の中に異彩を放つ部分もある。見覚えのあるペダルが、あたしの記憶を刺激する。
あたしの視線に気付いたか、天海君は笑った。
「ちょっとお借りしました、ってな。さすがに、ここが錆びまくって、使い物にならなくてさ。工藤にやってもらったよ」
ＳＤＶ機溝。あたしたちの飛行機の要となった、動力源がそこにはあった。
「さてと……じゃ、乗れよ」
自転車にまたがった天海君はそう言って、親指で背中を指差した。乗れって、この荷台らしきところに乗れというのだろうか。金属であるそこは例によって錆びていて、正直気は進まない。
でも……呼び出してくれたってことは、きっと何かがあるんだと思って、素直に荷台に腰を乗せた。天海君の肩に手を乗せると、彼は「よし」と言って、すぐに自転車を漕ぎ出す。
見た目は相当ぼろぼろなのに、あまりぎぃぎぃと壊れかけた音がしないのは、要の部分が新しいからだろうか。
公園をゆったりとした速度で出た自転車は、すぐに坂道へ差し掛かった。街を下る、大きな坂だ。
「しっかり、つかまってろよ」
言うより早く、自転車は坂道を『転げ落ちる』
すさまじい速度だった。声すらも出ない。なのに、天海君はさらにその速さを増していく。
「あ、天海君！　ストップ！　ストップ！」
「あ！？　何！？」
あまりに速いためか、お互いの言葉は通り過ぎる風に阻まれてうまく耳に届かない。
どちらも全力に喉を震わせて、意思を疎通させる。
「とまってぇ！　怖いって！」
「三咲！　それは駄目だ！」
「何でっ！」

「ってかっ、目ぇ、瞑るなよ！　しっかり見開いて、ほら！　前向けっ、前！」
目を瞑るな、なんて無茶な頼みだ。こんなの、ジェットコースター以上だ。怖すぎる。
「何があんのよ！　馬鹿！」
「だから前見ろって！　前を！」
怖いけど、すごく怖いけど。
あたしは思い切って瞼を上げた。

きっと、伝わった。天海君が何を思ってこうしたのか、即座に、理解した。
これは、滑走路だ。飛行機が飛ぶために作られた道。

「っ、空に連れてくのは、無理だ！　なんだかんだ、工藤が無理だって言ってんのに、俺に出来るわけがねぇ！　でもさ！　だったらっ、見せてやるよ！　俺が必ずっ、三咲が満足する青空をっ、いつか見せてやるよ！」
そこで自転車はブレーキをかけた。けたたましい、うるさいブレーキ音が数秒。自転車は動きを止めた。丁度、海と公園の中間地点だ。
振り向いた天海君の顔は、一瞬だけ見て、もう直視できなかった。自分自身のみじめさ具合が、露呈された気分になる。
「絶対だ、はぁ、やく、そくする。俺が、どんな方法かしらねーけど。絶対に見せる」
そんなもの、望んでいない。
あたしは、あたしは！
「いら、ない」
「ああっ？　何、言ってんだよ。お前が望んでいたんじゃ、ねーか」
「あたしはただ、……逃げてただけだよ！　ただ怖くて、我武者羅に逃げ道を探していただけだよ！」

まだ息が安定しない天海君に、あたしは全てをぶつけた。気分が高揚していたからなんて、言い訳にもならない。口が絶え間なく動いているのを客観的に感じて、『終わった』と思った。あたしたちの関係は、心地のよい二人は、終止符が打たれた。あたしが、壊してしまった。あたしのために動いてくれた天海君の想いを、完全に――

「だったら、」

でも、彼はいう。

「だったら、何だってんだ。怖い？　そりゃそうさ。世の中、怖くない選択肢なんてない。いつも皆、先の見えない未来に戸惑い、それでも一つの選択をして前に進むんだ。三咲だって、今までそうやって生きてきたんだよ。だからさ……」

天海君はくるっ、と頭を前に向けた。反射的に、あたしは天海君の腰に手を回した。

「悩むだけ悩めばいい！　時間なんて、案外なんとかなるもんだよ！」

「意味わかんないっ！」

スタート。

自転車は再び、前進を始めた。

でも、今度は瞼を下ろさなかった。天海君が用意してくれた風景を全て、記憶に刻み付けたかった。

なぜ、刻み付けようなんて、思ったのか。それはきっと、決まったからかもしれない。馬鹿らしいけど、愚直な彼を見て、わけのわからない行動を見て、未来がみえたのかもしれない。

「内村もっ、空も工藤もっ、みんな協力してくれてんだぜ！　お前、人望あるんだよ！　うじうじすんのはいいけどっ、一人ですんな！　俺たちだってっ、力になりたいんだよ！」

十字路を横切る瞬間に、見えた一つの影。高速の中でも、はっきりとわかるその姿は、空のものだった。

車が少ないとはいえ、一台も通らなかったのはそんな理由らしい。

きっと晴ちゃんも工藤君も、協力してくれている。通行止めなんて、勝手にやっていいことじゃないのに、馬鹿だ。とても、馬鹿だ。

もう、天海君は言葉を発さず、ひたすらに自転車をこいでいた。

本当に、この人は……。

「……ばか」

聞こえはしない。わかっていて、呟いた一言だった。

自転車は、ぐんぐんと速度を増す。

青空が、段々と近づいている錯覚。

片手を目の前の彼から離して、空へ伸ばした。

手が届きそうなのに届かない。でも、充足感は消えない。

この先のおぞましく感じられる複数の未来が、今だけは、なくなったように思えた。

大きな彼の背中が、目の前にある。そっと額を押し付けた。

自転車は、ぐんぐん速度を増す。

頬をなでる風が、とても、冷たい。

「……ばかっ」

もう一度呟いた。

この世界の全てに。目の前の、ばかだけどまっすぐで、とてもか

っこいい奴に。

押し付けた背中から頭をはずして、背中越しに正面を見た。

そこにあったのは、ただのありふれた、どこにでもある青空だけだった。

8．背中に乗せて（後書き）

読了ありがとうございました。勢いで完結まで持ってきた作者こと、秋色です。

さてさて、今回書いたお話「スカイスロープ」は、高校時代から結構暖めていたネタで、青春ど真ん中をイメージとして執筆しました。青春て、あんた何歳やんとか、自分でつっこみたくなるけれど、気にしません。ええ、気にしません。

実は、っていうか、これを読んでいるであろう方々は気付いていると思われますが、伏線をまったくといっていいほど回収しておりません。まあ、伏線といっていいのかも微妙なあれですが、とにかく拾っていません。

その事について謝罪と共に、続編があるよー、という意味での伏線でもありました。伏線が伏線てあんた……とかいう突っ込み、お待ちしてます（嘘です）。

いやいや、続編については本当なんですけどね！

そもそも、長期的に、長い目で考えた作品なんです。夏休みを越え、秋が来て冬が来て、彼らの関係とか、周囲の変化とか、そんなものを感じ取って楽しんでいただきたい。一年を巡ってもまだ、青春という輝きの中にいる彼らのことを、これからも暖かく（？）見つめ続けてくれると、うれしいです。

とはいえ、すぐに続編掲載、ってわけでもないですけど（笑）

次回は短めなお話を書こうと思っています。

さて、そろそろ、作品自体の話に触れますか。少しですがね。

青春ど真ん中青臭いラブストーリー。

ってことで締めます。え？　それだけですよ？

特段語る事も無いでしょうし、まあ、書いたまま読んだまま。それら全てが事実で、皆様方が想われたこと全てが、この作品の本質です。

なげやりなわけではないですよー？　ここ、テストに出ます。

ではでは、感想がなにかあれば、コメントやらなんやらで送ってくれると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3595y/

スカイスロープ

2011年11月23日06時53分発行